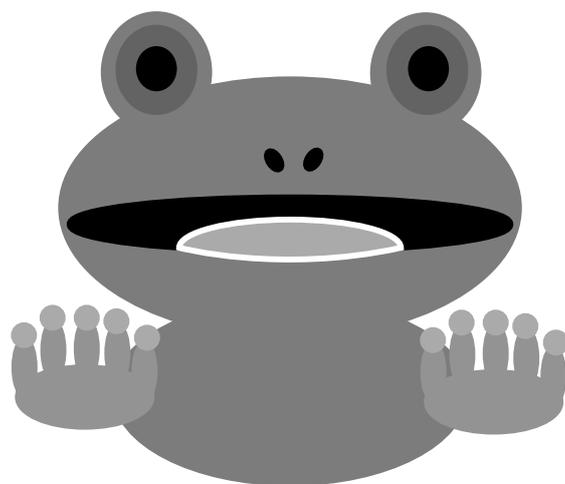


**新しい物語が生まれだした
「つながりこわし」から「つながりづくり」へ
みんなでつくるコムケア物語の4年目**

**コミュニティケア活動支援プログラム
2004年度 活動報告書**



**住友生命社会福祉事業団
東レ株式会社
コミュニティケア活動支援センター**

コミュニティケア活動支援センターは住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社より本プログラムの実行事務局を受託している組織です。

「つながりこわし」から「つながりづくり」の時代へ

■「つながり」を壊してきた社会

全国のNPOや市民活動をささやかに支援しながら、誰でもが気持ちよく暮らせる社会に向けて、さまざまな活動をつないでいく。これがコムケア活動*の目指していることです。

この数十年、私たちはさまざまなつながりを壊してきました。

人とのつながり、自然とのつながり、地域社会とのつながり、歴史とのつながり、さまざまなつながりを壊すことで、経済を発展させ、生活の利便性を高めてきたと言えるかもしれません。

たとえば、企業はつながりを切ることで、生産効率を上げ（その象徴が分業です）、労働力を確保し、市場を拡大してきました。行政も効率を高めるために縦割り行政を展開してきました。私たち自身も、近所付き合いのしがらみから自由になるとか、家族のつながりを弱めるとか、お互いの問題に踏み込まないとか、つながり壊しに加担してきたように思います。

その結果、経済は発展し、私たちの生活も便利になりました。

でも何かが欠けている、と私たちは気づき始めました。

そればかりではありません。経済も壁にぶつかり、社会もたくさんの問題を顕在化し始めました。

そして、みんな気づきだしたのです。「つながり」が大事ではないかと。

最近のNPOや市民活動の広がり背景には、そうした状況があると思います。

■「つながり」は社会の一番大切な資源

人のつながりこそが社会にとっての一番大事な資本（ソーシャルキャピタル）だという認識が広がりだしました。

時代のキーワードが「つながり」になったのです。

そして、これまではばらばらに活動していた人や組織がつながりだしました。関心を同じくする人たちがつながって、NPOをつくりだしました。そのNPOが企業や行政と協働しはじめました。異質な課題に取り組んでいるNPOのつながりも急速に広がっています。

しかし、注意しないといけないのは、そうした市民活動もまた、それぞれが自分たちのテーマや世界に埋没してしまいがちなことです。それでは結局、何も変わらないのではないかと、そういう思いがコムケア活動の出発点でした。

ですから私たちはさまざまな問題をつないでいくことによって実現できる「大きな福祉」を理念に掲げました。そして、「つながりづくり」にこだわっているわけです。それも表情のある個人につながりに。

■個々の問題をつなげていくことで実現する「大きな福祉」

私たちが活動の名称に使っている「コミュニティケア」も、最近ではよく使われるようになりました。私たちは、この言葉に関しても、専門的な定義などにとらわれることなく、誰でもが気持ちよく暮らせる社会に向けてのすべての活動をコミュニティケア活動と呼んでいます。

ケアとか福祉というと、どうしても高齢者介護だったり子育て支援だったり、あるいは難病や障害の問題だったり、個別の問題解決をイメージしがちですが、私たちの生活は、そうしたさまざまな問題が絡み合って成り立っています。ですから個別問題だけを見ていてもなかなか問題は解決しないように思います。

そこで、私たちは、コミュニティケアという言葉の中心は、やはり「つながり」だと考えました。人のつながりがなければ、どんな立派な制度も施設も十分な効果はあげられないのではないかと考えているのです。

コムケア活動の仲間は、実にさまざまな活動に取り組んでいます。環境問題も文化活動もありま

すし、平和活動や防災活動もある。コムケアのメーリングリストに登場するテーマはあまりに多様なために、少し整理してほしいという要望があるくらいです。

しかし、私たちはあえて、テーマを絞り込もうとは思っていません。テーマが多様であればあるほど、世界は豊かになり、そこから生まれる物語も魅力的だと思うからです。それに社会における問題はすべて、必ず「つながっている」からです。

■世代や障害を超えた交流から生まれる新しい物語

問題をつなぐことは、同時に世代や地域をつなぐことでもあります。

特に重要なのは、世代間交流、世代を超えたつながりです。

たとえば介護問題というとある一定の世代の人しか関心を持たない傾向がありますが、実は介護保険制度をどう育てていくかは、すべての世代の問題ですし、ニートや引きこもりの増加を社会の仕組みに対する問題提起と捉えれば、まさにこの社会をつくってきた大人たちの問題です。

大きな福祉は、世代を超えたつながりの中から生まれてくるはずですが、世代を超えた交流が育てば、おのずとそれぞれの新しい役割も見えてきます。そこからきっと、「支援する人」「支援される人」という一方的な関係ではなく、お互いが「支援しあう関係」が生まれてくるはずですが、それぞれの違いを認め合いながら、一人ひとりが主役の社会への第一歩は、まずは心を開いたつながりから始まります。

世代だけではありません。さまざまな障害もまた、つながりの大切な要素です。お互いの障害を共有できれば、お互いに支えあう関係が育ち、私たちの生活はもっと気持ちよくなっていきます。さまざまな人がいればこそ、社会は豊かになっていきます。

世代や障害を超えたつながり、世代や障害の違いを活かしたつながりから生まれる新しい物語は、きっと楽しい物語になるでしょう。

■大きな福祉を目指した、新しい「結い」への道

「つながりこわしの時代」から、「つながりづくりの時代」へ。

そのビジョンに基づいて、コムケア活動は、今年もさまざまな「つながり」を深め、そこから「新しい物語」を育ててきました。

コムケア活動が目指している、大きな福祉を目指した、新しい「結い」への道も、少しずつ見えてきたような気がします。

本報告書は、こうしたコムケア活動の4年目の記録です。

活動に参加して下さったみなさんに感謝いたします。

*「コムケア活動」は、私たちが取り組んでいる活動の総称です。

2005年5月20日
コムケアセンター事務局長
佐藤修

今年度から、住友生命社会福祉事業団に加えて、新たに東レ株式会社からもご支援いただいています。この活動に共感していただき、全面的に支援して下さっている両社に感謝します。



3つのキーワード

◆大きな福祉

社会にあるさまざまな問題を、みんなが自分の問題として共有化し（つまり当事者になって）、みんなが知恵と汗を出しあいながら、みんなにとっての新しい価値（積極的な解決策）を創出していくこと。これが、私たちが考える大きな福祉です。福祉というと、介護や高齢者問題など、特別の問題をイメージしがちですが、私たちの生活や社会はさまざまなものが複雑に絡みあっています。ですから、個々の問題ごとに解決していくと同時に、それらをつなげていく必要があります。

◆コミュニティケア

コミュニティケアという言葉は、一般的には、「さまざまなハンディをもつ人々を、隔離された施設ではなく、地域社会の中で、自立した生活が送れるように支援しようとする考え方」とされていますが、私たちはもっと広義に捉え、「お互いに気遣い合いながら、放っておけないことに対して、それぞれが出来る範囲で汗と知恵を出しあうこと」と考えています。

コミュニティとは「重荷を背負いあった人間のつながり」ですが、私たちは最近、重荷を背負いあう関係を捨ててきたように思います。しかし、重いので捨ててしまった重荷の中に、実はとても大事な宝物があったのかもしれない。そんな思いもあって、改めて重荷を共有する、人と人のつながりを大事にしていきたいと考えています。

◆共創型相互支援の輪

コムケア活動は、誰かが誰かをケアするという一方向的な活動ではありません。参加した人が、お互いに支援し支援される双方向的な関係を目指しています。ケアすることで実は自らがケアされていることに気づけば、活動は持続し広がっていくはずです。やや気負って言えば、この活動を通して、社会に、「ケアしあう文化」の風を吹きこみ、さまざまな活動を「大きな福祉」に向けてつないでいきたい。それによって、相互支援の輪をみんなで育てていきたいと考えています。共創とは、一緒に汗と知恵を出し合って、新しい価値を創りだしていくことです。

目次

第1部 プログラムの概要と活動報告

1. プログラムの概要	6
2. 資金助成プログラム	6
3. 活動支援プログラム	10
4. 交流支援プログラム	11
5. プログラムへの評価	12
6. 資金助成プログラム選考委員講評	14
7. これからの展望	17

第2部 資金助成プロジェクト活動報告

1. 活動支援プロジェクト	19
2. 活動費一部支援プロジェクト	29
3. イベント支援	34

[コラム]

・ 3つのキーワード	4
・ このプログラムでは、こんなことを大切にしています	9
・ イベントはコムケア仲間のつながりを育てる場	38

このプログラムを通して実現したいこと

○安心快適社会に向けての「大きな福祉」への関心の醸成

福祉というと、高齢者介護とか障害者支援などの直接的な問題解決に目が向きやすいが、将来的な問題も含めて、すべての人が安心して快適に暮らせる社会づくりを「大きな福祉」と捉え、そうした活動への助成を通して、社会における「大きな福祉」「安心快適社会の実現」への関心を高めていく。

○さまざまな市民活動をつなげる共創型相互支援の輪づくり

実際に市民活動に取り組んでいると、忙しさの中でなかなか外部に目を向ける余裕がなくなり、タコツボにおちいりがちだが、効果的な活動をしていくためには、さまざまな市民活動が連携し支えあっていくことが必要である。テーマを超えて、さまざまな市民活動が学び合い、支え合う「共創型相互支援の輪」を広げていく。

第1部

1. プログラムの概要

このプログラムは、みんなが気持ちよく生活できる社会に向けて、さまざまな活動に取り組んでいる市民活動団体や個人を支援することを目的としています。

資金助成が中心に置かれていますが、単なる資金助成プログラムではなく、応募された市民団体と一緒に、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを理念としています。つまり、支援する側と支援される側に分かれるのではなく、資金以外のものも含めて、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指した、活動の輪づくりプログラムです。

市民活動のネットワークの大切さは多くの人が指摘していますが、自らの課題を超えて、あるいは現実の忙しさを超えてつながっていくことは、口で言うほど簡単なことではありません。市民活動に取り組んでいる人たちは、当面の課題に追われがちで、ほかの問題に目を向ける余裕がなかなか持てないのも現実です。

しかし、社会の複雑さを考えれば、個別課題への対応だけでは限界もあります。一見、関わりが少なく見える問題が、深くつながっていることも少なくありません。個別課題を超えて活動をつなげていくことが、問題解決にとって重要になってきているように思います。

このプログラムが対象にするテーマは、「大きな福祉」に向けての「コミュニティケア」です。このプログラムでは、みんなが気持ちよく生活できる社会（大きな福祉が実現している社会）に向けての活動はすべてコミュニティケア活動と考えています。ですから、なんでも対象になります。プログラムの性格が曖昧になるという意見もありますが、私たちは敢えて切り口をできるだけ広げたいと思っています。それが大切だと考えるからです。

■目的：支えあいの輪づくり

次の2つがこのプログラムの目的です。

- ①コミュニティケアの分野で活動している（あるいはこれから活動しようとしている）市民活動団体の、新しいプロジェクトを支援すること。
- ②そうしたことを通して、さまざまな市民活動のつながりをつくり、お互いに支援しあえる市民活動の輪を育てていくこと。

■支援形態：共創型相互支援の関係

資金助成だけでなく、応募された市民団体の活動に関して、可能な範囲で何でも相談に応じることにしていますが、

それを可能にしていくために、応募された市民団体にも自らの強みを活かして、他の団体の支援に参加していただく仕組みになっています。

つまり、支援する側と支援される側に分かれるのではなく、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指しています。参加（応募）したみなさんにも、自分たちの強みを公開してもらい、できる範囲で「支援する側」でも活動してもらうことを呼びかけています。

■プログラム：参加者の意見を踏まえて進化させていきます

(1) 資金助成プログラム

- ①新規プロジェクト支援（30万円と10万円の2種類）
- ②イベント支援（一律10万円）

(2) 活動支援プログラム

活動に関するすべての相談に可能な範囲で応じ、このプログラムに関わってくださったみなさんを巻き込みながら、問題解決に努力します。

(3) 交流支援プログラム

参加した人たちが交流し学びあえる場を、さまざまなかたちで創出していきます。

2. 資金助成プログラム

(1) 新規プロジェクト支援

大きな福祉の実現に取り組んでいる団体やこれから取り組もうとしているグループの新しいプロジェクト起こしを中心に、総額400万円の資金助成を行いました。

■募集活動

7月12日に募集要項を公表し、9月3日までの期間、次のメディアを通して募集を行いました。

- ・募集案内チラシの配布
- ・各種のメーリングリスト
- ・コムケアセンターのホームページ
- ・コムケアサロンや地方交流会での呼びかけ
- ・新聞などでの告知案内

■応募に関する相談

応募段階から相談に応じました。相談内容は申請書の書き方などが中心でしたが、プロジェクト起こしそのものや団体の運営に関わるものもありました。電話やメールのほか、直接、事務所まで相談にくる団体もありました。

また、コムケア団体訪問や地方交流会などの際にも、その地域の団体からプロジェクトの相談を受けることもありました。資金助成とは関係なく、活動支援がはじまったものもあります。

■応募状況

応募件数は総数144件でした。全国から応募されてきていますが、北海道や東北への浸透がまだ不十分であることが読み取れます。

テーマ別には、個別の問題に限定せずに、生活の視点からのまちづくり的な取り組みが増えていることが注目されます。活動主体も広がっています。外国人とのコミュニケーションなどを扱うプロジェクトも増えてきています。個別問題では、今回は「不登校・引きこもり問題」が多かったのが印象的です。また自殺対策に取り組むプロジェクト（2件）が初めて出てきました。

<地域別分布>

北海道	1
東北	7
関東	60
中部	24
関西	27
中国四国	10
九州沖縄	15
合計	144

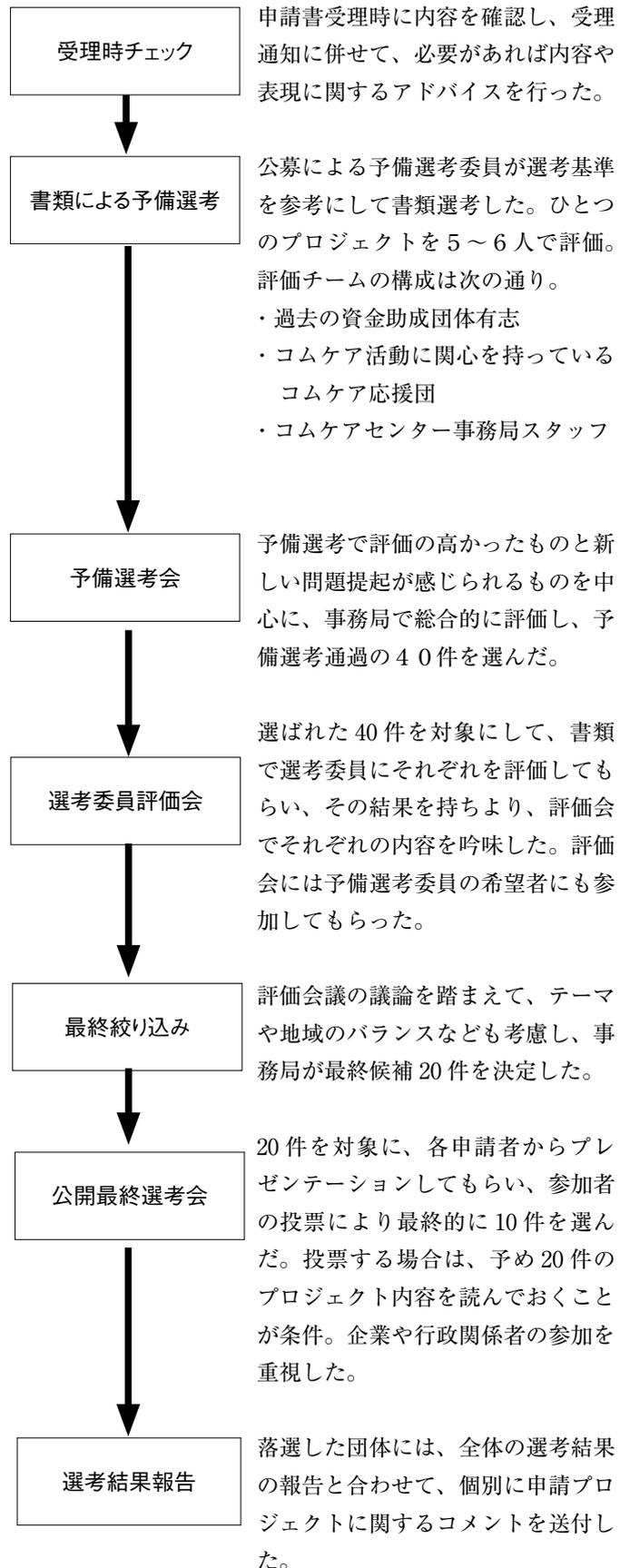
<テーマ別分布>

障がい支援	30
地域福祉	30
子育て	20
芸術・文化	11
高齢者	17
環境	5
介護者支援	6
国際交流	6
女性	5
スポーツ	3
その他	11
合計	144

■選考方法

選考の進め方はホームページで公開し、途中でも選考がどう進んでいるかわかるようにしました。選考に関しては、できるだけ多くの人に事前評価をしてもらい、そこで選ばれたものを専門家から構成された選考委員に評価してもらい、それを踏まえて事務局で20件の最終選考候補を決定しました。その20件を、応募者も参加できる公開選考会でそれぞれから発表してもらい、参加者の投票により支援先を決定しました。

大きな流れは次の通りです。



■選考基準

選考に当たっては、次の点を参考としてもらいましたが、最終的には「大きな福祉」の視点からプロジェクト全体の意義を考え、総合的に判断するようにしました。

- ① 社会性：本プログラムで定義する「大きな福祉」の理念に沿っていること
- ② 先進性：これまでなかったような新しい要素が含まれていること
- ③ 発展性：一過性のものではなく、継続的であり発展が期待されること
- ④ 汗のかき具合：お金で解決しようとしていないこと
- ⑤ 支援の必要性：支援することが実現の不可欠な要素であること

■選考委員

予備選考は実践的な立場にいる人と第三者的に活動に関わっている人とを組み合わせることに留意しました。昨年引き続き、昨年度までの応募団体の有志が自発的に参加してくれたことも大きな特徴です。なかには昨年に引き続き引き続けてくださった方もいます。

選考委員は昨年同様、コムケア理念に共感してくれている専門家にお願いしましたが、選考委員には「選考」というよりも、予備選考で選ばれた個々のプロジェクトの内容に関して、それぞれの専門的な立場から評価してもらいました。

最終選考会には、応募団体も含めて、96人が自発的に投票に参加してくれました。

<予備選考委員>

○これまでの応募団体からの有志選考委員 6人

- 東孝次（NPO法人まちのよそおいネットワーク）
- 太田敬雄（NPO法人国際比較文化研究所）
- 大矢野由美子（NPO法人ユニバーサルデザイン生活者ネットワーク）
- 橋本克己（NPO法人彩星学舎）
- 藤澤浩子（NPO法人よこすかパートナーシップサポーターズ）
- 横尾徹也（UDくまもと補助犬サポーター）

○コムケア応援団 14人

- 青木智弘（諫早干潟緊急救済東京事務所）
- 飯沼勇一（アド・エンジニアーズ）
- 江原顕（自治体職員）
- 大川新人（コミュニティビジネス研究センター）
- 檜木八重子（NPO法人ともに生きる）
- 小山美代（社会福祉士）
- 坂谷信雄（自治体職員）
- 佐藤隆（コムケア応援団）
- 新谷大輔（三井物産戦略研究所）
- 瀬谷重信（コラボレーション経営研究所）
- 那須直樹（早稲田大学オープン教育センター）
- 平野幸子（明治学院大学社会学部附属研究所）
- 増山博康（環境クラブ）
- 渡辺早苗（住友生命保険相互会社）

○コムケアセンタースタッフ 5人

- 佐藤修（コムケアスタッフ）
- 佐藤ユカ（コムケアスタッフ）
- 橋本典之（コムケアスタッフ）
- 宮部浩司（コムケアスタッフ）
- 矢辺卓哉（コムケアスタッフ）

<選考委員>

- 片岡 勝：市民バンク代表
- 北矢行男：多摩大学教授
- 木原孝久：住民流福祉総合研究所代表
- 町田洋次：ソフト化経済センター理事長

<公開最終選考会で投票に参加した人> 96人

最終選考対象団体	20
上記以外のNPO	28
企業関係者	27
行政関係者	8
学生	7
選考委員（出席者のみ）	2
その他	4

* 選考に参加する資格条件

- ①対象となるプロジェクトもしくはその団体に関わっていないこと
- ②事前に対象プロジェクトの申請書を読みこんでおくこと
- ③選考会には最初から最後まで参加すること

■選考結果

次の20件が支援対象になりました。

<活動支援プロジェクト>（30万円助成）

1. 障害者の自立体験室の設置（自立生活支援センター夢風船）
2. 病児保育問題解決のための革新モデル『こどもレスキューネット』（フローレンス）
3. 東京都等の公共施設に関する言葉の道案内の作成普及事業（ことばの道案内）
4. 高齢者による地場産業（綿作り～ガラ紡績）復興の為の作業施設運営（ガラ紡愛好会）
5. まちの多言語警告・差別表示に関する調査（移住労働者と連帯する全国ネットワーク）
6. 自死遺族支援のための「つながり」づくり（自殺対策支援センターライフリンク）
7. 留学生のボランティア派遣事業（TAE）
8. HappyPostman 参上！小学生ボランティアグループが地域に幸せをお届けします！（Happy Postman）

9. Temple マスター：寺の清掃業務をビジネス化する（ステップアップアカデミー teachers）
10. カフェ＆マッサージ事業立ち上げプロジェクト（手がたりの会）

8. 障害者が働くりサイクルショップ再生計画（ちいろば）
9. Tシャツ／キャラバン～DVがなくなる日をめざして！（主張するTシャツの会）
10. 出前ミュージアム～芸術と障がい触媒とした「愛のコミュニティ」の構築に向けて（海から海へ）

<活動費一部支援プロジェクト>（10万円助成）

1. 日本版「高齢者委員会」準備会の発足（シニア・システム協議会）
2. 奥津軽新生プロジェクト（奥津軽地域振興会）
3. 仲間による仲間のための遠距離介護の電話相談窓口開設（離れて暮らす親のケアを考える会パオッコ）
4. 市民の立場で介護保険の見直しを実現するプロジェクト（市民福祉情報 オフィス・ハスカップ）
5. 「みんなで作って、みんなで売ろう」紙漉きプロジェクト（トゥギャザー）
6. パークでパクパク多世代間コミュニティづくり（パクパクサロン）
7. 不登校児の自然体験と大学生・高齢者との交流（あそあそ自然学校）



このプログラムでは、こんなことを大切にしています。

「結いこむ」VOL.5 から転載

■事務局と応募団体との仲間関係

このプログラムで心がけているのは、事務局も応募団体と同じ目線で、一緒に考えていくということです。ですから、応募段階でも積極的に相談に乗っています。また、応募してくれたみなさんのアドバイスを活かして、このプログラムをさらに効果的なものにして考えています。

■事務局の立場

選考結果の理由を、責任を持って事務局が答えられるように、このプログラムでは第3回から選考の最終決定は事務局が行っています。これは応募団体からのアドバイスの結果です。選考委員の責任にしたりすることはできないように、事務局としても主体的な判断を大事にしています。

■金の切れ目が縁のはじまり

資金助成プログラムの多くは、資金助成期間の終了と共に関係が終わってしまうことが多いですが、このプログラムでは資金助成が終わった時から本当のお付き合いが始まると考えています。助成を受けられなかった団体とも、お付き合いを始めたいと考えています。資金助成プログラムは関係づくりの入り口と考えています。

■選考過程の透明性と参加性

選考過程をできるだけ公開し、応募団体にも選考過程に参加してもらうようにしたいと考えています。まだまだ不十分ですが、昔の頼母子講のように、応募団体みんなで選びあえる仕組みをつくっていくことが目標です。

■大きな福祉の理念

だれでもが気持ちよく暮らせる社会に向けての活動は、すべてこのプログラムの対象になります。コミュニティケアは、さまざまな問題のつながりの中でこそ効果が高まります。取り組みの入り口の課題はさまざまですが、その奥にある共通の理念や姿勢を大切にしています。

(2) イベント支援

資金助成プログラムへの応募団体の中に、何らかのかたちで応援していきたい団体があるにもかかわらず、資金助成プログラムの枠組みだけでは対応できないことが多いのですが、その問題を解消するために、昨年、実験的にイベント支援プログラムを実施しました。その体験を踏まえて、今年度から、コミュニティケアに関わる団体が主催する、「つながり」づくりのイベントに対する資金助成を行うイベント支援助成プログラムを正式に取り入れました。

資金助成額は一律 10 万円ですが、「つながりづくり」を目指すコムケア活動にとっては、とても重要なプログラムです。こうしたささやかな支援プログラムがもっと広がってほしいと思います。

■募集活動

活動支援プログラムの最終選考会でも告知しましたが、基本的にはメーリングリストとホームページでの呼びかけが中心でした。

活動支援プログラムで最終選考に残らなかった団体への応援の意味合いも込めたため、申請プロジェクトを吟味した上で、事務局から応募を呼びかけた団体もあります。

予告期間をもったこともあり、実際の募集期間は、11 月 1 日から 11 月末日までの短い期間にしました。

■応募状況

応募数は 19 件でした。これまでコムケア活動に参加したことのない団体からの応募も 8 件ありました。

■選考方法

募集要項に明記した、次の条件を踏まえて、事務局で選考しました。

<対象となるイベント>

- 1 「人のつながり」「人のふれあい」の要素があること
- 2 自分たちで企画運営する手づくりのイベントであること
- 3 複数のコムケア仲間が参加すること

*コムケア仲間とは、コムケアの考えに共感し、コムケア活動に参加したことのあるグループを指す。

- 4 大きな福祉の理念に即していること
- 5 活動報告書を作成すること

■選考結果

次の 10 件が支援対象になりました。

1. 「冬休みたごっこパーク 8Days: 静岡県(ゆめ・まち・ねっと)
2. 「コムケア・富山での知恵交流会」: 富山県(あそあそ自然学校)

3. 「ちば NPO ユースフォーラム 2005」: 千葉県(コミュニティアート・ふなばし)
4. 「ひだまり交流会 2005」: 群馬県(国際比較文化研究所)
5. 「アート種の大冒険!」: 福岡県(Y2 工房)
6. 「市民参加の公園づくり～公園からつながろう」: 茨城県(パクパクサロン)
7. 「介護保険法改正と市民活動を考えるシンポジウム」: 東京都(市民福祉情報 オフィス・ハスカップ)
8. 「社会に風を起こしませんか!」: 東京都(SEGNET)
9. 「神戸・中越・東京を結ぶ市民の集い」: 兵庫県(海から海へ)
10. 「スタンプING平和展」: 愛知県(スタンプING平和展実行委員会)

3. 活動支援プログラム

コムケア仲間(資金助成プログラムに応募したりコムケア活動に参加したりした団体や個人)に対しては、資金助成の対象であるかどうかには関係なく、その活動に対しては原則として何でも相談にのっています。

相談内容は多岐にわたりますが、内容によっては各分野の専門家や企業、病院などの協力も得て、対応するようにしています。

■申請プロジェクトに関するアドバイス活動

資金助成プログラムの活動支援関係に応募し最終選考に残らなかった 124 団体に対して、最終選考に残らなかった理由と申請内容に関する具体的なアドバイスなどを個別に書状で連絡しました。

簡単なコメントですので、十分なアドバイスにはならないと思いますが、相互支援関係のはじまりになればという思いから、第 1 回目以来、この活動を継続しています。この活動はその後の交流会などでも話題になり、またそれを契機に交流がはじまるなど、コムケア活動の理念や姿勢を理解してもらう効果がありました。

これまでの資金助成プログラムの多くは、選考過程や選ばれなかった理由などの説明が十分ではなかったが、説明を受けて納得したという声も寄せられています。こうした地道な活動が、資金助成プログラムの効果を高め、市民活動をエンパワーすることを改めて実感しました。

■資金助成団体との個別意見交換

資金助成団体に関しては、必要に応じて連絡をとりながら、活動に参加したり、相談に応じたりするなどの対応をしました。中間取材のかたちでいくつかの団体に直接訪問させていただき、意見交換しましたが、申請書などではわからない活

動の広がりを実感できました。

こうした活動から感ずることは、結局はみんな同じところ（「みんなが気持ちよく暮らせる社会づくり」）を目指しているのだということと、それぞれの活動が触れ合うことによって相互に学びあえることがたくさんあるということです。また、もっと社会に見えるようにしていくことが大切だとも思っています。市民活動にとって、社会に向けてのコミュニケーション活動はとても重要になってきています。

■個別活動相談への対応

資金助成団体以外からの活動に関する相談も引き続き行っていますが、コムケア活動を知って、行政や企業、あるいはコムケア仲間以外の人からの相談も増えてきました。また、NPOに対する資金助成プログラムを始めるところからの相談や行政からの相談もあり、実際のプログラム開発の参考にしてもらいました。

相談が契機になって、コムケア活動の応援団になったり、活動に参加したりする人も増えています。気楽に相談に来てもらえるように、コムケアセンターのオフィスももっと公開していく予定です。

■コムケアセンター事務所の開放

本郷にあるコムケアセンターのオフィスを、コムケア仲間にも活用してもらうことも始めました。市民活動にとっては、場所の確保は大きな課題です。東京のコムケア仲間に対しては、要請があれば、可能な限り、オフィスを開放しています。また、地方のコムケア仲間には、いわば東京のオフィスとして、出張時に活用してもらう便宜も提供しています。

さらに今年度から、コムケア仲間に対するシェアドオフィス構想を打ち出し、一部のコムケア仲間には有償でオフィスとして使ってもらうことも開始しました。

単なる場所としての共同の場ではなく、人的にも活動的にも共創関係が育っていくような、新しいコモンオフィスの実現に向けて、さらに参加者を増やしていく方向です。

4. 交流支援プログラム

本プログラムの理念にそって、さまざまな交流の仕組みをつくっています。

■資金助成プログラムに関連しての交流の仕組み

最終選考会は単に資金先を決定するだけのものではなく、そこで他の分野の市民活動がどのような問題意識でどのような取り組み方をしているかを学びあう場でもあります。参加者からは、「全国で同じような思いで活動している仲間がいることを知って元気づけられた」とか「みんな同じような悩

みを持っていることがわかって、またがんばる気力がでてきた」という意見が寄せられています。

大勢の前での自分たちの活動紹介やプロジェクト説明をしたことは初めてという団体も多いですが、これからの市民活動にとっては、外部とのコミュニケーション能力は非常に重要です。その意味でも、こうした形での交流体験は有効だと考えています。

選考会の後の交流会からも毎年、いくつかの新しい出会いと物語が始まっています。

■メーリングリスト

電子ネット上でのメーリングリストは参加者が400人近くになりました。さまざまな立場の人が参加しているために、議論も活発です。

イベント案内や情報提供などでも活用されていますが、問題にぶつかった人が悩みや問いかけを投げかけると、すかさずさまざまな立場からのコメントやアドバイスが投稿される、とても密度の濃いメーリングリストに育ってきています。「大きな福祉」や「つながり」の視点が強まっているのが特徴です。

このメーリングリストでのつながりを生かした、各地でのオフ会がこれからの検討課題です。

■コムケアサロン

本郷のコムケアセンターのオフィスで、コムケア仲間を中心に意見交換会を開催しています。今年度はテーマを設定して開催しました。問題提起者はコムケア仲間ですが、いずれも実践に基づく話ですので、実に生々しく刺激的です。参加者は、NPO関係者に限らず、企業や行政の人、学生など、さまざまですが、それが話し合いを豊かにしています。そこから意外なつながりが生まれ、新しい物語が始まることもあります。



今年度開催したサロンは以下の通りです。

- 第 17 回「ノーマライゼーションと大きな福祉」(8月3日)
- 第 18 回「社会全体で取り組む子育ては可能か？」(9月7日)
- 第 19 回「生業としての農 その可能性をどう拓くか？」(10月12日)
- 第 20 回 気楽な忘年会サロン (12月14日)
- 第 21 回「マスコミとどうつき合うか」(1月18日)
- 第 22 回「対話入門」(2月22日)
- 第 23 回「事業型 NPO の可能性と問題点」(4月26日)

サロンの効用は大きいので、各地でもこうしたサロンが始まらないかと思っています。

■ニュースレター「結いこむ」の発行

オンラインのメーリングリストとオフラインの出会いの場、そしてニュースレター「結いこむ」が、コムケア活動を支える3つのメディアです。これらを有機的に組み合わせることで、コムケア仲間のつながりが深まっていくと考えていますが、「結いこむ」の発行は、今年度も3回にとどまりました。

「結いこむ」の制作も、コムケア理念に基づいての「共創型」にこだわっていますが、第6号では「大きな福祉から見た介護」というテーマで、7つの団体に呼びかけて、特集を組みました。できればこうしたことを踏まえて、イベントも共創していくことを検討しています。

現在は「結いこむ」編集部はコムケアセンターですが、これからは各地のコムケア仲間が編集を持ち回りする「移動編集部」スタイルを検討したいと思っています。

■ホームページ

本プログラムは基本的に情報を公開していく姿勢をとっているため、選考過程や支援先プロジェクトの動きなどもできるだけホームページに掲載しています。今年度は、ホームページも全面的にリフレッシュしました。

ホームページを持っていないコムケア仲間には、このホームページの一角を使ってもらおう構想も検討しましたが、最近では簡単にホームページが開設できるようになりましたので、むしろ、コムケア仲間のホームページと積極的にリンクしていく方向に切り替えました。

今年度はさらに、共創型ホームページを目指して、再び全面更新する予定です。

5. プログラムへの評価

資金助成団体対象に、期間終了後、活動報告書と共に、このプログラムの内容や運営に関するアンケート調査を行いました。主な意見を紹介します。

■資金助成プログラムに対する評価

- ・活動を起こそうとする全くの素人集団にこそ応募するチャンスを与えて欲しいので、もう少し普通の人知って、応募してみようという力を起こすことができるような方法があれば良いです。
- ・事業内容の欄が小さいため、プロジェクトの全体像を表すことに苦労しました。しかし、限られたスペースに最大限わかりやすくアピールすることにより、何をやろうとしているのか、自らも整理することができました。
- ・一部助成になった場合には何をするか、最初から明確な方が良いと思います。
- ・申請したとおりに資金を使うのも大切ですが、本当に必要なものに資金をかけられるまで長期を見越して下さっているというスタンスが有難かったです。実際に活動して思い通りにいかないことも多いので、気分的に余裕が持てました。
- ・新しいモデルケースを創る故に、試行錯誤があったりする場合でも、比較的自由度が高い故に、意欲高く事態に臨むことができました。

■資金助成以外のプログラムに対する評価

- ・「プログラム」として提示できるような具体性を持った企画になっているか疑問。
- ・メーリングリストは、NPOのセーフティネットと言えて、大切と考えています。コムケアサロンは、惹かれることも多々ありますが、時間が合わないことが多く、参加の機会を模索しています。
- ・メーリングリストは、非常に活発で様々な情報が双方向で流れていて驚いています。特に、公開選考会でお会いした方などの投稿を拝見すると、まったく知らない方からの投稿とは違い、関心の度合いが高まります。
- ・コムケアサロンは、場所や時間を変えたりして参加しやすい工夫をして欲しい。

■公開選考方法に関する評価

- ・「熱意」は紙面上だけでは伝えきれないので、公開選考会は今後も継続させて欲しい。
- ・「大きな福祉」というコムケアの意図に合うものが、最終選考会で本当に選ばれたのか疑問に思った。
- ・他の方の活動を知ることができ、かつ知り合いになれて輪が広がるので、とても良かったです。公平感もしっかりとありました。
- ・東京まで出向くのが大変と思いましたが交流する機会（お昼も含め）があったことが後々、ご連絡を取っても顔が浮かび、より身近でお話できて良かったです。
- ・プレゼンテーションでの選考はとてもすばらしいと思います。みなが納得する形ではないでしょうか？ただ、よい活

動でもプレゼンが苦手な団体であると不利になってしま
いますが・・・。

- ・独特の雰囲気が増上になるとありました。野球にたとえ
ると、甲子園球場や、フェンウェイ・パークのような、
他にない、独特のオーラです。いささか緊張してしま
いました。

■「大きな福祉」についての意見

- ・現在は「大きな福祉」の定義のような活動にはなってお
りませんが、個々の団体がそれぞれの活動を成功させてい
くことにより自然とそういう方向に向いていくものと考え
ています。
- ・福祉世界は広いと思います。僕らが目指すものは、助けら
れる側も助ける側も対等な関係です。その中でも大きな
福祉の意味があるかもしれません。
- ・共感していますし、自身の目標でもあります。今の子ども
たちにしっかりと、その芽を生えさせ、養ってもらいた
いです。
- ・個々の活動で頑張れる団体はたくさんありますが、それに
固執してしまうきらいがあります。大きな福祉で社会を
とらえ、横のつながりをつくるのは素晴らしいと思
います。
- ・地域の課題は、本来単独で起こっているものではなく、ま
た、単独で解決できるものではありません。「大きな福
祉」の考え方がもっと広まれば、それぞれの課題を他人
事ではなく受け止められ、少しずつ社会が変わっていく
のではと思います。

■「共創型相互支援の輪づくり」についての意見

- ・具体性に欠けると思う。
- ・「大きな福祉」を実現するためには共創型相互支援の輪づ
くりから始まるものだと考えますので、相互支援は
とても良いことだと思います。
- ・同感です。私たちはこれを地域でやりたいと思います。コ
ムケアのように大きくはできませんが、そのノウハウを
共有したいと思います。
- ・それぞれの団体の特色や弱点を補強しあえばとても大きな
力になると思います。
- ・必要なことと感じます。ただ、完全無償を前提にしてしま
うと、持続性が失われることもあります。例えば、少し
ずつでも、参加費をプールするなどして、謝金や地域通
貨が回る仕組みが大切と感じます。

■プログラムに対する提案

- ・公開選考会の際、プレゼンの準備をしっかりとしてくるよ
うにと参加者たちに、もっと打ち込んでよいのでは。
- ・今回、助成金プログラムに応募することも助成を受けたの
も初めての経験でしたが、各々の団体が工夫していることな
ど一覧できるものも作ってみるのも良いと思う。
一年で終わってしまうのは残念です。3年・5年版もあればい
いと思います。
- ・助成団体同士の交流や意見交換の機会が増えると、より良
いのではないのでしょうか？ 例えばカテゴリーを分けて分科
会のようなものがあると良いと思います。



6. 資金助成プログラム選考委員講評

(1) 選考委員の感想

■片岡勝（市民バンク代表）

4年目になったコムケア資金助成の交流会で審査員として挨拶させてもらった。

「多様なテーマが集まり、競争し、提携し持ち寄られて問題を解決していく皆さんの試みが、日本を新しい社会変革に向けて加速しシフトさせる」というようなことを言わせてもらった。

その後、久しぶりの東京で地下鉄に乗りながらそれを反芻していた。私は東京生まれ東京育ちだが「地域から日本を変える」と宣言し居を地方に移した。飛行機と新幹線が主な住まいになった。市民が社会サービスの主たる担い手になるという仮説のもとに、市民バンクなどを創設しコミュニティビジネスを支援してきた。戦後、日本人は行政にサービスを委託してきた結果、依存体質が染み付いてしまった。既に市民セクターに能力も金もあるのに、なかなか、その潜在力に気付かないで来た。表彰を受けた方のひとりが「政府の方針はいろいろ説明されるが、結局は障害者への支援はなくなっていく」と不満を述べられていた。欲しい・足りない・出せないの議論に風穴を開けるのは自ら雇用を創出する仕事作りだと思う。簡単ではないが、そんな企業をも巻き込む動きも始めている。組織がないと社会参加できない行政や大企業で働く人々はそこで頑張ってもらえば良い。ただ、政府の言う官民競争入札制度のような市場テストで効率性と有効性を民間と競うことが条件になる。

交流パーティーで会った大学4年生は「先生の本を読みました。『就職してみないと社会は分からない、という学生の質問に、それは君に自信がないからだ』という文章に出会い、就職せずにケアプランを自分で作る活動を自分の事業にしようと決心しました」と元気が良い。今不足しているのは地域で、こういう事業を起こそうという人々だ。地域の財を持ち寄り・組み立て事業化する。そんなリスクを自らとる社会作りが増えれば、古い体質の残滓を早くなくすことになる。コムケアに応募された皆さんが経済性を自らのものとして自律する過程で私との接点ができると嬉しい。そんな多様な地域経営者作りこそ旬なテーマだ。それを地域に作る仕事は忙しいが面白い。私自身、楽しくてしょうがない。『地域から日本を変えよう！』

■北矢行男（多摩大学教授）

4年間のコムケアのプロジェクト審査に係って、「コミュニティでの問題解決への取り組みが市民的拡がりを見せており、この動きが着実に進展しつつある」という強い印象をも

ちました。

ただ、今年も気になったことは、応募された皆さんの中に、「自分たちの取り組みは正しいのだから、支援を受けて当然だ」という暗黙の考え方があるようにも見受けられたことです。

そのためか、お金のフレームも含めて、第三者（たとえば行政）に頼らないで、自前で問題を解決していこうと気概が足りないように思いました。身近にある様々な要素を有機的に結びつけ、ソシオ・ビジネスとして展開していけば、自立してやっていけるだろうと思われるプロジェクトが多く見受けられただけに残念でした。

とにかく、「自前のプロジェクト」として、経営的に自立してやるのだという志を徹底して貫くところに、知恵が生まれ、関係者の協力も芽生えてくるのだと思います。そのため経験交流の場が、コムケアセンターなのだと思います。

■町田洋次（ソフト化経済センター理事長）

私が担当したのは、第一次評価がすんだ40件を20件に絞る作業だった。この20件を最終評価会議にかけて10件を選び助成先を決める。

40件を、1位から40位に並べたところ、上下の差は大きく広がった。上位のものはとびきりよいが、下位にくるのは、がっかりするほどダメなのだが、この格差の広がりには驚いた。

なぜだろうと考えたが、これはコムケアの活動が未広がり広がっている証拠で、まだ始めたばかりの新規参加が増え、一方、先発隊はどんどん先に行っている現象なのだと理解した。

事業を始めたばかりの人と、3年やっている人を較べると、それは3年の事業プランのほうがよく見える。熟度の差だが、これが原因だろうと想像した。ほんとは、新規参加者グループ、3年グループとかに分けて、同じ熟度どうして比較するとよいのだが。

これが今回の評価の感想であるが、社会起業で大切なことは、「やり続けること」である。やっている、共感した人々が寄ってきて、活動は進化する。収益第一主義の起業では、やり続けても赤字だと倒産だが、社会起業ではこれがない。

創業時に借金をするわけではなく、人の輪を大きくし、お互いに助け合う社会をつくるのが目的だから、やり続ける効果は絶大である。爆発するまでやり続けろ、だ。爆発しなくても、自己実現ができた楽しみがあったのだから、それでよいではないか！

こんな境地になることが必要だ。今回助成からもれた人は、めげずに続けてほしい。そうすれば、いつかはよいことが訪れるはず、と思う。

(2) 予備選考委員感想

■青木智弘（諫早干潟緊急救済東京事務所）

本年、初めて予備選考を手伝いました。いい応募も多かったのですが、コムケア助成の趣旨などを誤解していると思われる応募も多かったです。厳しいことを言うようですが、全国各地で活動されている方々の熱い思いは伝わってくるのですが、「思い込みはダメ」という気がします。私の反省も踏まえると、人は汗をかくうちに、客観的な思いが、独善的な思い込みが変わっていくことがあります。そのような思い込みを排しながら活動を続けるのは難しいのですが、最終選考に残られた団体のみなさんも、残念な結果になったみなさんも、日々の活動を継続しながら、悪い意味での「思い込み」を排して行って欲しいなと感じました。

また、応募団体が入手している様々な情報に、明らかな地方間格差があるような気がします。大都市圏以外、あるいは都道府県庁所在地以外の団体は、活動や助成の情報過疎状況にもおかれているような気がします。そのような地域の団体の活動が、よりよい活動を目指すために、情報入手等をするのは中々むずかしい状況なのかなあ、と思われませんが、シーズ＝市民活動を支える制度を作る会や、助成財団センターのホームページ等を活用しながら、さまざまな情報を入手し、また、よりよく学ぶことで、全国の活動がより良くなると素晴らしいなと思っています。

■東孝次（特定非営利活動法人まちよそ）

予想どおり難しい審査でした。いずれの活動も社会性がありその重要性を十分理解することができました。しかし、すべてを推薦する訳にはまいりません。では、どう区別するかです。ここから苦渋が始まるのです。申し訳ありませんが、私自身の嗜好によるしかありません。審査基準によることは申すまでもありませんが、申請者の意欲が伝わってくるか、多くの人が繋がっているか、助成金の使われ方に必然性があるかといった観点からも審査させていただきました。それにしても、熱心な取組に優劣をつけることは、至難の業ですね。今回の審査を通じて、審査員に分かってもらえる申請書を作成することの難しさも痛感しました。昨年応募させていただきましたが、よく厳しい審査委員の目を通ることができたなと恥ずかしい思いもしました。昨年の審査員の皆さんに感謝の気持ちで一杯です。

全国には実に様々な活動が展開されているなど、今更ながら感じました。こんなにすばらしい人たちがいるのに、どうしてもっと暮らしやすい世の中にならないのでしょうか。

■飯沼勇一（(株)アド・エンジニアーズ）

毎回そうなのですが、選考に当っては大変難儀をします。

応募者の皆さんの熱い思いを肌で感じるからです。今回も同じでした。どちらを推薦すべきか、迷うことの連続でした。しかし今回は前回と違うように感じたことが一点ありました。それは、事業計画書の中に「何としても」という熱い思いを書き込んでいるものが、前回より少なくなったのではないかと、という点です。行政にも出来ない。企業にも出来ない。NPO だけしか出来ないことをやる。そういった領域が段々狭まってきているのかもしれませんが。

考えてみれば、施行以来4年。NPOの数も1000をはるかに超えています。まったく新しいものは難しいのかも知れません。しかしここはチエの出どころ。皆が膝を打つやり方があるはず。選考には、そういう視点も加えてみました。いまおやりの活動にも、チョッとだけ工夫をすれば新しい領域になりそうなプロジェクトが沢山ありました。NPOもチエと差別化の時代といえそうです。

■太田敬雄（特定非営利活動法人国際比較文化研究所）

評価してみて、申請する立場と評価するものの見方の違いを少し感じています。2年前、私も助成の申請をして落とされた事がありますが、あの申請はもしも今現在の私が評価していたら、きっと落とすだろうと感じています。

それにしても、この評価は難しく、大分迷いました。評価基準など、結構明確に定められていたと思うのですが、「一つの評価を出す」ということはむ大変難しい作業ですね。そして、内容以上に申請書の書き方に左右されてしまうものですね。

先進性、発展性は当然「やってみただけ駄目だった」ということになるリスクを負うことを意味しているわけでしょう。しかし、現実には評価する時にはつい、そのリスクの無いものを選ばなくてはいけないような気分になってしまうものですね。

そのリスクを負っても助成してみたいかどうかは、本当は書類だけでは不十分で、企画している人の「目を見て判断する」部分が必要ですね。その意味で最終の選考会の重要性を再確認させられました。

■小山美代（社会福祉士）

毎日のように虐待や子どもの事件が後を絶たない。子どもが健全に育ちにくい、そして育てにくい日本といえる。この社会環境を変えなければ、日本の明るい将来は期待できないと思える。今回の提案は、子育て支援のテーマのなかでいくつか評価できるものがあつた。たとえば、子育てに不安を感じているママにカウンセリングの研修や子育てサークルの組織や事業の運営に関する支援である。中には、つぎの世代にバトンタッチできるものを目指した提案もあり、これからの発展が期待できる。

つぎに、「食」について。伝統的な食文化が崩れており、

24時間オープンコンビニには、いつでもパンやおにぎりを買うことができる。そのため、家族と共に食事をしなくなり、子どもたちの個食が増加している。コンビニの食べ物は画一化しており、コンビニ中心の食生活では豊かな味覚も、そして個性も育たないであろう。創作料理や伝統的な料理をお年よりたちと楽しもうという試みはユニークである。お年よりにとっては郷土料理を伝承していくことは、生きがいの創出にもなる。核家族でお年よりと触れ合う機会が少ない子どもたちには、このような「食」を通しての関わりも意義があるにちがいない。

ところで、全国のあちこちで様々なコラボレーションが芽生え、着々と広がっている。たとえば、障害者団体同士のネットワーク、都市部と農村部、子どもと高齢者など、今までアンマッチングと考えられていたものが、うまく結びついて新しい風が生まれている。

一方、高齢者は保護され、弱い立場の人たちというイメージであったが、今回の提案を読み、何か異質のものを感じた。元気でアクティブな高齢者たちは、自己主張し、生活の質の向上をめざした活動を進めている。

コムケアの活動には、元気な高齢者がどんどん参画し、培ってきた知見を活用してほしい。それにより、いっそう柔軟で幅広く、地域に根ざした市民活動となっていくであろう。

■平野幸子（明治学院大学社会学部附属研究所）

30部申請書が送られてきたときは、やややゝ大変なことに手を挙げてしまった・・・と焦りモードでした。が、読ませていただき、わくわくしたり、夢を見ているようだったり、楽しい時間になりました。全国には、こんなにいろいろな「大きな福祉」を描いている方たちがいるのですね。

そういう意味では、予備選考とはいえ、自分の必ずしもニュートラルとは言い切れない選考に、申し訳ない気持ちにもなりました。積極的に偏ったつもりはもちろんありませんが、自分の実践から近いプロジェクトにはどうしても期待が大きくなったように思います。また、当たり前ですが、書類からの選考の限界もあるのだろうとも感じました。どうしても、計画や予算から事業がどう立体的になるのだろうかと想像を巡らします。書類の書き方として具体的でなければ、おもしろそうと思っても、立体像が浮かばないので押せませんでした。でもこれは、計画を文字化せずに始まることはないだろうことを考えると、書類上で他者に伝わるよう記すというのは、プロジェクトに取り組む上での必要なスキルということなのかもしれません。

逆に、立体像が浮かんだプロジェクトについては文字化で終わらないことを祈り、それを様々な立場の者が応援したりしあったりすることが必要なのだろうと改めて思いました。

市民活動を直接行っている立場ではありませんが、その端っこくらいのところで関わりを持っていくことに、今回は本

当に幸せを感じました。ありがとうございました。

PS. 夢を感じさせてくれたプロジェクト、機会をぜひ作って現地を訪ねてみたいと思いました。

■橋本典之（コムケアスタッフ）

コムケアスタッフとなり、2度目の資金助成プログラム。今回は、前回と違い一部の申請書に関わらせて頂きました。前回と同様、選考作業は、とても難しく、申し訳ない気持ちになりつつも、申請書から伝わる全国からの熱い思いに元気をもらいました。

コムケアに参加し始めて1年半ほど経ちましたので、様々な活動を知ることができましたし、コムケアの理念の理解も深まってきました。今回は、その経験をもとに申請書を読ませて頂きました。

選考をしていて、とても残念だと思うのは、団体の理念がとても素晴らしいのにプロジェクト自体が一回だけの単発イベントのみの計画しか書いていないところが多かったことです。選考基準の中に「発展性：一過性のもではなく、継続的であり発展が期待されること」というのがあります。単発イベント自体がいけないと言っているのではなく、そのイベントから今後どのような展開をしていくのか？それを申請書のプロジェクト計画書に含めて頂きたかったのです。実際にお会いして話しを聞けば、おそらくその視点は含まれているのだと思いますが、申請書からしか伝わらないので、その点が残念でした。

しかし、限られたスペースで思いを伝えることは、容易なものではないと思います。ただ、この思いを伝えるというスキルは、助成金をもらう時だけでなく、大切なものだと、予備選考に関わらせて頂く中で強く感じました。それと同時に、プロジェクト名の大切さも感じました。一行・数十文字の言葉が大きな膨らみと輝きを持っている申請書がいくつかありました。

予備選考は、終わりました。次は、10月31日に行われます『最終選考会』です。144団体の中から選考に残った20団体がプレゼンテーションを行います。最終選考会は、参加する皆さん一人ひとりが、選考委員ですので、皆さまの参加をお待ちしております。

■藤澤浩子（特定非営利活動法人よこすかパートナーシップサポーターズ）

コムケアの「大きな福祉」という理念は、言い換えれば"well-being"を意味していると思います。様々な分野の活動を通して、みんなが幸福を感じて生きられる社会の実現を目指している方々が、日本中にたくさんいることが実感でき、とてもうれしく思いました。日頃の活動のご様子が目に浮かぶような記述が多く、申請者の熱意が伝わってくる中、一定数を選考するのは辛い作業でした。予備選考では、団体概要と申請プロジェクト計画書のみをもとに評価選考作業を行い

ます。申請書によっては、もう少し詳しい情報を拝見してみたいと思うものがありました。また、いくつかの申請書では、支出計画金額の計算ミスや、プロジェクト概要等の誤字が気になりました。こうした点は、書類が完成したら、第三者に見てもらうなどして再点検すると、応募前に発見できるでしょう。今回の入選落選に関らず、応募団体の皆様の活動が大きく発展しますように。

■矢辺卓哉（コムケアスタッフ）

コムケアに関わってからはじめて選考に参加しました。私の感想は、皆さんは必要な活動で大事なことをやっているという前提でのお話です。

まず、コムケアの助成金は単なる助成金ではないと思っています。つまり、この助成金を通じて各団体が何を目指し、どう発展したいのか。それにみんなが共感し、助成するのがコムケアの助成金だと思っています。しかし、各団体の申請書を読ませていただくと、団体としてこのプロジェクトを通じて何を団体として実現し、発展したいのかというのが明確ではなく、わかりにくかったです。

具体的には、申請書の「達成目標」がその箇所に当たると思うのですが、プロジェクトを実行する「目的」と団体としての「達成目標」が同じように記入する団体が多く、「目的」と「達成目標」が的確に理解している団体が予備選考で選ばれていました。

私は、NPO や市民活動はいかに共感を集めることができるかだと思っています。自分の活動がいかに素晴らしい活動をしていると思っても、客観的に自分達の活動を見てみて、振り返ってほしいと思いました。

しかし、申請書 144 件を読ませていただき、全国各地の取り組みを知ることができました。助成されたところも、そうでないところもこの縁を大切に、コムケアに関わってほしいと思いました。このたびは本当にありがとうございました。

■横尾徹也（UD くまもと補助犬サポーター）

私は 30 件を担当しましたが、すべての申請書で情熱が感じられ普段から本当に一生懸命に活動に打ち込まれていることがすぐわかりました。

ただ、申請書を見て選考する過程で「惜しいなあ」と強く感じました。わずか A4 の 2 枚程度で団体の概要、活動実績、プロジェクトの目的・目標・概要の全てを表現することは至難の業であることは解ります。しかし、限られた紙面の中で、自分達の団体が目指してきたもの、活動してきたものを明らかにして、直面した課題解決のために今回のプロジェクトを是非実施する必要がある、実施の際のノウハウ等は他の団体等の参考になる、それを十分に誰にでも解るように訴えるべきだと考えています。

残念ながら全ての申請が十分には書ききれなかったよう

に感じました。

自分の思ったことを表現することは難しいことですが、せっかくの熱意も努力も正しく伝わらなければ評価されません。今回はそのことを強く感じました。

最後に、今回の選考機会を通してたいへん勉強になりました。機会を与えてくれた皆さまに感謝の意を表してコメントとさせていただきます。

7. これからの展望

コムケア活動は、第 1 期の基礎づくりを終えて、現在第 2 期に入っています。

第 1 期の活動の総括とそこから生まれた新しい物語のいくつかは前年度の報告書で報告しましたが、第 2 期の課題は、全国に広がりを持ったコムケのネットワークを、コムケア仲間が主体的に活かしあう、「オープンプラットフォーム」に育て上げていくことです。昨年度報告させていただいたような「新しい物語」がそこから次々と生まれていくことを目指したいと考えています。

それに向けての検討会も開催しましたが、これからは新たにコムケアアドバイザー制度を発足させ、コムケアのネットワークを実践的に使いこみ、活かしこみながら、みんなでこのオープンプラットフォームを育てていきたいと思っています。

目標は、新しい「結び」（支え合いのコミュニティ）の構築です。

新しい結びの構築

結びこむネットワーク



第2部

資金助成プロジェクト活動報告

1. 活動支援プロジェクト

■ 障害者の自立体験室の設置（自立生活支援センター夢風船）	19
■ 病児保育問題解決のための革新モデル『こどもレスキューネット』（フローレンス）	20
■ 東京都等の公共施設に関する言葉の道案内の作成普及事業（ことばの道案内）	21
■ 高齢者による地場産業（綿作り～ガラ紡績）復興の為の作業施設運営（ガラ紡愛好会）	22
■ まちの多言語警告・差別表示に関する調査（移住労働者と連帯する全国ネットワーク）	23
■ 自死遺族支援のための「つながり」づくり（自殺対策支援センターライフリンク）	24
■ 留学生のボランティア派遣事業（TAE）	25
■ HappyPostman 参上！小学生ボランティアグループが地域に幸せをお届けします！（Happy Postman）	26
■ Temple マスター：寺の清掃業務をビジネス化する（ステップ アップ アカデミー teachers）	27
■ カフェ & マッサージ事業立ち上げプロジェクト（手がたりの会）	28

2. 活動費一部支援プロジェクト

■ 日本版「高齢者委員会」準備会の発足（シニア・システム協議会）	29
■ 奥津軽新生プロジェクト（奥津軽地域振興会）	29
■ 仲間による仲間のための遠距離介護の電話相談窓口設置（離れて暮らす親のケアを考える会パオッコ）	30
■ 市民の立場で介護保険の見直しを実現するプロジェクト（市民福祉情報 オフィス・ハスカップ）	30
■ 「みんなで作って、みんなで売ろう」紙漉きプロジェクト（トウギャザー）	31
■ パークでパクパク多世代間コミュニティづくり（パクパクサロン）	31
■ 不登校児の自然体験と大学生・高齢者との交流（あそあそ自然学校）	32
■ 障害者が働けりサイクルショップ再生計画（ちいろば）	32
■ Tシャツ / キャラバン～DVがなくなる日をめざして！（主張するTシャツの会）	33
■ 出前ミュージアム～芸術と障がいを触媒とした「愛のコミュニティ」の構築に向けて（海から海へ）	33

3. イベント支援

■ 「冬休みたごっこパーク 8Days: 静岡県（ゆめ・まち・ねっと）	34
■ 「コムケア・富山での知恵交流会」：富山県（あそあそ自然学校）	34
■ 「ちば NPO ユースフォーラム 2005」：千葉県（コミュニティアート・ふなばし）	35
■ 「ひだまり交流会 2005」：群馬県（国際比較文化研究所）	35
■ 「アート種の大冒険！」：福岡県（Y2 工房）	36
■ 「市民参加の公園づくり～公園からつながろう」：茨城県（パクパクサロン）	36
■ 「神戸・中越・東京を結ぶ市民の集い」：兵庫県（海から海へ）	37
■ 「スタンピング平和展」：愛知県（スタンピング平和展実行委員会）	37
■ 「介護保険法改正と市民活動を考えるシンポジウム」：東京都（市民福祉情報 オフィス・ハスカップ）	38
■ 「社会に風を起こしませんか！」：東京都（SEGNET）	38

■障害者の自立体験室の設置

特定非営利活動法人 自立生活支援センター夢風船

団体名 特定非営利活動法人自立生活支援センター夢風船
代表 樋口英夫
設立 2003年2月17日
目的 障害者および高齢者に対して、地域で自立生活を営んでいくために必要な事業を行い、福祉の増進を図り、社会全体の利益の増進に寄与すること。
所在 福岡県行橋市
ホームページ <http://www7.ocn.ne.jp/~youme/>



○プロジェクトの目的と概要

自立生活支援センター夢風船には、大きな「夢」がある。障害を持つ仲間が、地域で「自立生活」をしたいと願った時に、それを応援してくれる「自立の家」の建設である。そこには、重度の障害があっても生活できる「自立生活体験室」があり、生活する力をつけるためのプログラムや精神面でのサポートやカウンセリングの仕組みも整備されている。仕事をしたい人には仕事場もあり、自立のための宿泊体験もできる。運営の主体者はもちろん障害者自身だ。

「自立の家」長期構想は次の文章で始まっている。

「重い障害を持っている私たちは、これまで人里離れた山の中の施設や近くに友だちもいない家の中だけの寂しい生活をおくってきました。また心の病による周りの人達の無理解によって傷つくこともしばしばありました。でも「たった一度の大切な人生」、地域の中でたくさんの仲間たちや大切な人にかこまれながら、自分らしい生き方をしてみたい。仕事や恋愛、そして様々な社会の役割を担って自分にしかできないオリジナルな人生を歩みたい、そう思い始めたのです。」

そんな「自立の家」の実現を目指して取り組んだのが、今回の「障害者の自立体験室」プロジェクトだ。大きな夢に向けての第一歩である。

○活動内容と成果

自立とは、「どこに住むか、いかに住むか、どうやって自分の生活をまかなうかを選択する自由」というのが夢風船の考え方だ。「自分の事なのに、『自分で選び決める』ということが、障害を持つ私たちにはほとんど不可能でした。それは、障害者＝出来ない人(かわいそうな人)としか見てもらえなかったからです。しかし最近では、福祉のサービスを受ける存在から社会に働きかける存在へと役割を変えつつあります」という夢風船メンバーの山本龍実さんの言葉に、このプロジェクトに対する思いと姿勢が感じられる。

自立体験室づくりは、単なる施設づくりではない。大切なことはそこで何をやるかだが、ビジョン(夢)がしっかりしているおかげで、そのプログラムはできている。

まず、ピア・カウンセリングを行ってから、本当に一人で自立して暮らしたいのか、暮らしていけるのかを体験室で模擬体験

してもらおう。体験室では、銀行のATMの使い方、財産管理、ヘルパーへの指示の出し方、調理実習などを行う。実際に地域で生活することになった場合は、住居を探し、ヘルパーなどの必要なサービスを調整する。自立後のプログラムもしっかり計画されている。

体験室を通して一人暮らしを始めた障害者が、次の体験室利用者に自立のノウハウを伝える仕組みも計画されている。「障害を持つ自立生活者が伝えるノウハウは、健全な人たちが伝えるものよりも効果的で、障害を持つ人自身が実際の成功例を伝えるので、勇気や希望も見えやすい」からだ。

こうした活動を効果的に行うためには「場所」が必要だ。新たに建設する資金はないので、いまある部屋を改修することにしたが、他からも資金助成を得ることができたので、当初の予定よりも使いやすい体験室が実現できることになった。

○これからの展開

体験室は6月に完成する予定である。障害は個人によってまったく違った表情を持っているために、限られた予算で、みんなが使いやすい体験室にするためには大変だったようだが、時間をかけた分、いいものができたし、仲間の絆も深まった。

夢の実現に向けて、一歩踏み出すことができたが、一人でも多くの人が親元や施設を離れて自立してほしいと考えている山本さんたちにとっては、これからの本番である。やるべきことが山積みだ。

それに、自立体験室を活かしていくためには、自立生活を阻んでいる社会の仕組みや人の意識も変えていかなければいけない。

地域社会の道や店舗、公共施設などにまだ残っているバリアをなくしていくことはもちろんだが、家族や施設が障害者本人の意思とは関係なく与えてくれる生活支援も考え直していく必要がある。「幼いころより大人にいたるまでの育つ環境が、障害者自身の自己決定能力を育ててこなかったのではないかと山本さんたちは考えている。そうした状況を変え、みんなの意識を変えていってはじめて、自立体験室が生きてくる。

夢風船の大きな夢への物語が、これからどう展開していくか、とても楽しみだ。

■病児保育問題解決のための革新モデル『こどもレスキューネット』

特定非営利活動法人 フローレンス

団体名 特定非営利活動法人フローレンス
代表 駒崎弘樹
設立 2004年4月1日
目的 病児保育問題（子どもの突発的な発熱や風邪の時に保育園に代わって預かる「病児保育」が発展しない）を解決するための成功事業モデルをつくり、そのノウハウをオープン化し、サービスを普遍化させていくことによって、病児保育問題を過去のものとする。こと。
所在 東京都品川区
ホームページ <http://www/florence.or.jp>



○プロジェクトの目的と概要

フローレンス代表の駒崎弘樹さんには保育園時代の思い出がある。両親が働いていた関係で、自分が病気になった時に、両親がとても大変だったという記憶だ。社会起業家を目指す駒崎さんが「病児保育」のテーマに取り組みだした原点はここにある。病児保育は多くの働く家庭から望まれていることだが、病児を引き受けってくれる保育園は今でも少ない。補助金制度の関係で経済的に引き合わない領域になっていることがその一因だ。ニーズが多いにもかかわらず、事業参加者が皆無に等しく、問題は解決されないまま「保育の闇」と呼ばれている。まさに社会起業家の出番である。問題があれば、必ず解決策はある。駒崎さんたちは、経済的に自立できる病児保育モデルの実現を目指し試行錯誤を重ねてきた。その答えが今回のプロジェクト「こどもレスキューネット」である。

仕組みの概要は次の通りだ。熱の出た子を持つ親から連絡を受けたら、地域でネットワークされたかけつけレスキュー隊員（多くはシニア）が現場に急行する。そして親から子どもを預かり、小児科に送り届け、診察後今度は子育て経験を持つ在宅レスキュー隊員の家に届ける。在宅レスキュー隊員は携帯電話などで提携小児科医と連絡をとり、医療面に配慮した保育を行う。このモデルならば、施設費用もかからず費用は抑えられるため、補助金にたよらなくても経済的に自立できる。事業モデルができれば、スワンカフェのようなフランチャイズ的展開もできるようになり、病児保育サービスが全国に広がっていく可能性もでてくる。

当面の目標は事業モデルを確立することだが、それができれば、そのノウハウを公開し、全国に広げていくことで、病児保育問題を過去のものにした。これが駒崎さんの思いである。

○活動内容と成果

まずこれまでの検討を踏まえて、プロジェクトを展開する地域を東京都の中央区と江東区に設定した。そして、最初に手がけたのがレスキュー隊員募集である。チラシやポスターを活用し、応募してきた人を対象に仕組みや役割を理解してもらったうえで、隊員になってもらうかどうかを決めている。

レスキュー隊員になってくれたら、次は病児保育に関する専

門知識を養ってもらうための研修だ。研修会は5回シリーズで、うち1回は実習スタイルをとった。子どもを預かる以上、万が一病状が急変し命に関わる状況に陥ることも想定されるので、実際に病児保育に取り組んでいる専門家や消防隊の人にも講師をお願いし、実践的な内容に心がけた。

並行して、地域の私立保育園や小児科とのネットワークづくりに取り組んだ。幸いにプロジェクトの趣旨に共感してもらい、複数の協力者を得ることができた。事業型を目指す以上、利用料金が重要になってくるが、これに関しては保育園の協力も得て、アンケート調査を実施し、事業収支を考えながら価格設定した。事業収支計画も1円単位までしっかりと立てた。次は利用希望者への説明会である。ウェブやチラシなどで募集したが、説明会には予想以上の参加があり、ニーズの強さを実感したという。

こうした準備を経て、4月1日にサービスを開始したが、予想以上に反響は大きく、1週間も経たない内に15人の会員募集枠が埋まってしまった。順調なスタートである。

○これからの展開

現在、レスキュー隊員12名のネットワークで利用会員15人のサポート体制を築いている。4月18日に初めてのレスキュー隊員出動があった。

2005年度の目標は、運営体制の改善を繰り返しながら、経済的自立を果たし、成功モデルを作り上げることである。2006年度からは、サービスエリアを近隣区に拡大すると同時に、「こどもレスキューネット」モデルを各地に提供、水平展開していく計画だという。今回のプロジェクトで駒崎さんが学んだことはたくさんあるだろうが、一番大きな成果は駒崎さんの次の言葉にあるように、新しい時代への確信が持てたことかもしれない。「利用会員は病児保育問題の当事者ということもあり、本プロジェクトの最終目標である病児保育問題解決に対して非常に共感されている。そして、病児保育問題の現状をみんなが共有し、それぞれがそれぞれの立場や思いからその解決に貢献するというコミュニティが形成されつつある」と駒崎さんは話している。

今回のプロジェクトが大きな物語へと育っていくことは間違いないだろう。

■東京都等の公共施設に関する言葉の道案内の作成普及事業

特定非営利活動法人 ことばの道案内

団体名 特定非営利活動法人ことばの道案内
代表 古矢利夫
設立 2004年5月6日（前身の言葉の道案内協会は2002年11月設立）
目的 一般の地図を道案内情報として使用できない視覚障害者に対し、言葉で道案内を行う視覚障害者のための地図を作成し、これをインターネットなどを用いて提供することで外出支援を行い、視覚障害者の社会参加のきっかけとなる環境を提供すること。
所在 東京都北区
ホームページ <http://kotonavi.jp>



○プロジェクトの目的と概要

自営業を営んでいた古矢利夫さんが病気で失明したのは40代になってからである。仕事、スポーツ、趣味と、幅広い活動をしていた古矢さんの人生は一変した。自分の意思で行動できなくなってしまったようで、一時は自分が「社会人」ではなくなったような気がしたという。しかし、落ち着いて考えてみると、視覚に障害があってもできることはたくさんある。古矢さんの挑戦が始まった。そのひとつが、視覚障害を持つ人たちに対する「ことばの道案内」の作成普及事業である。

自立した社会人になる出発点は、外に出ること。これが古矢さんの信念だ。外に出ることで、社会参加や仕事への道も開かれ、人間的にも成長する機会が増えてくる。しかし、いまの社会環境では視覚障害を持つ人が外出するには介助者が必要な場合が多い。もし音声で案内してくれるホームページがあって、携帯電話のWEBサイトに対応している仕組みができれば、介助なしで訪問先に行けるようになるだろう。まずは利用者の多い公共施設を中心に、そうした仕組みを完成し、それを普及させていきたい。これが今回のプロジェクトの目的である。

○活動内容と成果

「ことばの道案内」をつくるには場所を決めないといけない。まずは公共施設ということで、行政や地域のボランティアセンターなどと相談しながら場所を設定した。場所が決まったら、視覚障害を持つ人と一緒に、ボランティアの協力も得ながら現地調査を数回行い、それを文章化していく。

文章化にあたっては、安全性や正確性が重要である。利用者の判断によって受け取り方が変わってくるようなあいまいな表現は避けなければならないため、たとえば点字ブロックの敷設状況に関しても3段階の案内をしている。現地調査は複数のスタッフが担当するが、案内表現は統一しなければならないため、文章化にあたっては徹底的に議論し確定していく。これまでの活動の積み重ねで、表現規定に関するノウハウは蓄積されてきている。幸い、メンバーには表現にこだわりのある視覚障害者もいるので、表現に関する品質には自信があるという。

現地調査もノウハウが必要である。道案内には音の要素も重要だが、曜日や時間帯で聞こえてくる音が違うこともあるからだ。

また道の混雑度によって、人の歩く歩幅も違ってくる。視覚障害を持つ人が参加していることも大切だ。視覚障害のない人たちが作成した音声案内とは違ったものになる。

次に、文章化したものを音声ガイド付きのホームページに掲載し、携帯電話などでの利用ができるようにしていく。メンバーの一人がパソコンソフトの会社を営んでおり、現在はその人が全面的に協力してくれている。

今回は、2005年3月までに東京都内の区役所など50施設の道案内を作成し、WEBサイトに掲載することを目標にしたが、50を上回る施設案内を完成することができた。また北区の行政からは高い評価を受けて、区内のいくつかの施設についての案内作成を事業として委託されたという。

こうした活動を広げていくためには、もっと多くの人にこの活動を知ってもらう必要があるが、NHKなどのメディアでも取り上げてもらったことも大きな成果だった。

○これからの展開

今回のプロジェクトで、言葉の道案内システムのノウハウも充実し、案内の対象施設も増えてきたが、大きな課題はWEB環境の再整備である。案内施設が増えても、検索が容易に行えないのでは意味がないし、情報の更新をしっかりと行かないと逆に問題を起こすことになる。情報量の増加に対処していくためには、ホームページも含めて、本格的なシステムに変えていき、メンテナンスもしっかりとやっていかなくては行けない。そのためにはかなりの費用が必要になってくる。

これに関しても古矢さんたちは、すでに次の手を検討中である。そして、将来は事業型NPOとして自立していく計画だという。そのための一つの方法として、行動的な古矢さんは、企業を顧客にした言葉の道案内システムの構築事業にも取り組みだしている。

古矢さんたちの行動力によって、言葉の道案内が全国に広がっていくこともそう遠い先ではないだろう。

■高齢者による地場産業（綿作り～ガラ紡績）復興の為の作業施設運営 特定非営利活動法人 ガラ紡愛好会

団体名 特定非営利活動法人ガラ紡愛好会
代表 本田量子
設立 2001年7月2日
目的 絶滅の危機にある、日本独自の産業のガラ紡績と和綿作りを、地元のお年寄りの経験を伝授してもらい継承していくこと。そして、ガラ紡でつくった環境にやさしい不思議ふきんを全国に広げていくこと。また、そうした活動を通して、環境と共生できるまちづくりに役立っていくこと。
所在 静岡県浜松市
ホームページ <http://www.s-palette.jp/~s005garabo/>



○プロジェクトの目的と概要

ガラ紡愛好会というちょっと風変わりの名前のNPOの発端は子育て問題と環境問題だった。本田量子さんは生活の中に忍び込んできているさまざまな化学物質が母親や子どもたちの身体に大きな影響を与えていることに大きな不安を感じていた。そして、自分たちが動き出さないと事態は変わらないという思いから、近くの佐鳴湖の水質改善の活動を始めたのである。今から20年近くも前の話だ。その活動に取り組みながら、環境汚染の危険性を母親たちに知ってもらい、自分たちの生活を見直していく動きを広げていこうというのが本田さんの思いだった。

共感してくれた人たちと活動をしていくなかで、活動の世界は広がり、思いを持った人たちのつながりも広がりだした。そして、出会った「石けんのいらないふきん」がこの地域の地場産業のガラ紡績だった。そして新たに立ち上げたのがガラ紡愛好会である。

この会は名前の通り、存亡の危機にあるガラ紡を応援していこうという会だが、そこにこめられた思いと活動は、環境から福祉、教育、ひいては地域社会の元気につながる広がりや深みを持っている。なにしろ20年近い活動の結果、たどりついたテーマである。愛好会という命名にも、肩に力をいれずに自然体で取り組んでいく姿勢が現れている。

今回のプロジェクトは、「高齢者による地場産業（綿作り～ガラ紡績）復興の為の作業施設運営」。具体的に言えば、ガラ紡の原料となる和綿の栽培や紡績作業を広げていくための作業環境整備である。

○活動内容と成果

以前は多くの家で栽培していた和綿も、最近ではほとんどみられなくなった。ガラ紡績を継承していくためには原料の和綿を栽培することから始めなければならない。

昨年は試験的に栽培に取り組み、150kgの収穫に成功したが、それを踏まえて、今年は休耕田を借りて本格的な栽培を開始することになった。もちろん無農薬・無化学肥料である。畑作業の先生は地元のお年寄りたち。作付け地が増えると畑作りも大変になるが、小型耕運機を購入したのでとても便利になった、耕運機の操作の先生は83歳の浅田みちさん。

綿作りに参加するのはお年寄りだけではない。地域子ども育成事業の一環として公民館での綿づくり探検隊も行ったし、種まきには保育園の園児に参加してもらった。世代を超えた交流が育っていることも大きな成果である。それに参加したお年寄りたちはみんな元気になってくれる。

収穫された綿は、ガラ紡工場に頼んで製品にしてもらう。ガラ紡で作ったふきんは給水率が高いため洗剤を使わなくても食器の汚れがおちるので水を汚さない「優れもの」だ。「不思議なふきん」として販売しているが、とても好評で、ファンも広がっている。製品の箱詰めは近くにある授産所工房わかぎに頼んでいる。できるだけたくさんの人に関わってもらいたいというのが会の考えだ。自分たちが栽培した綿が製品化され販売されていくことは、参加した人たちにはとてもうれしいことだろう。

この活動が県の公民館機関誌で紹介してもらえたため、協力者も増えてきている。ことあるたびに、ガラ紡ふきんを紹介しているのでも、需要も増えてきている。そろそろ事業計画をしっかりと立てていく必要が出てきているようだ。

○これからの展開

4月に入って、いよいよ綿の種まきが始まった。県や新聞社などの協力もあって参加者も増え、すでに100か所を超える栽培地も確保できた。今年の収穫は1tを目指している。

うれしい話も飛び込んできた。ガラ紡愛好会の活動が知られるようになったおかげで、不要になったガラ紡機を譲ってもらえることになったのだ。ガラ紡を動態保存していきたいと思っているガラ紡愛好会には願ってもない話である。それに、今度は自分たちでもふきんをつくることができるようになる。

ますますたくさんの綿が必要になってくる。ガラ紡ふきんもどんどん売っていかねばいけぬ。しかし、それはますますたくさんのつながりが生まれていくことだ。活動はまた一歩前進しつつある。

もう浜松だけでは間に合わないかもしれない。仲間を全国に広げていく必要がある。

みなさんどうですか。本田さんに連絡するときと綿の種を送ってもらえると思います。それに「石けんのいらない」ふきんも、ぜひお勧めですよ。

■まちの多言語警告・差別表示に関する調査プロジェクト 移住労働者と連帯する全国ネットワーク

団体名 移住労働者と連帯する全国ネットワーク
代表 渡辺英俊
設立 1997年4月29日
目的 多文化・多民族共生社会をつくることをめざし、移住労働者の権利が尊重され、
自らが持っている力を発揮することができ、自分らしく暮らしていくことのできる
社会の仕組みをつくること。
所在 東京都文京区
HP <http://www.jca.apc.org/migrant-net/Japanese/whatsnew/s-watch/index.html>



○プロジェクトの目的と概要

プロジェクトの推進者の一人、矢野まなみさんが移住労働者の問題に関心を持ったのは高校の現代社会の授業だった。当時はアジア諸国からの日本への出稼ぎ労働が増えてきており、また、エンターテイナーとして働く外国人女性の問題も話題になっていた。それ以来関心をもちつづけ、就職後も気になって、NPOに参加するようになった。

その活動の中で、外国人労働者に対する差別表示が気になりだしてきたが、2003年秋頃から外国人に対する取締りが強化され、犯罪や事件を外国人と結びつけるような表現を含む多言語警告掲示が増えてきた。なかには「不良来日外国人犯罪に注意」などとあからさまに表現しているものもあった。一方、移住労働者の暮らしに役立つ情報は相変わらず日本語中心である。移住労働者＝犯罪者予備軍とみなしている文化を変えていきたいと矢野さんは考えた。

そこで、仲間と一緒に「外国人差別ウオッチネットワーク」を発足させ、まちのなかでどのような情報が多言語化され、何が多言語化されていないのか、そしてどのような表現が用いられているかを全国各地で調査していくプロジェクトを立ち上げたのである。結果をインターネットで広く公表し、そのような掲示物が差別を助長するという社会的認識を形成するとともに、そのような掲示物をなくし、移住労働者にとっても暮らしやすいまちづくりを考える動きを起こすことが目標である。

○活動内容と成果

調査活動にできるだけ多くの人に参加してもらい問題を共有してほしいという思いから、まず取り組んだのが、調査マニュアルやチェックリストの作成である、これまでに収集していた情報をもとに試用版を作成し、12月にプレ調査を実施。その結果をもとに、調査視点の整理やチェックリストの改良を行い、2～3月に本格的な調査を実施した。調査地はターミナル駅や外国人が多く集まっている地域を中心に選定した。調査地は23か所に及んだ。

チラシやメールなどの呼びかけに応じて、各回4～12名ほどの参加があった。外国籍の参加者もいた。移住労働者の問題に関わったことのない人も毎回必ず何人か参加してくれたことも

大きな成果だった。「もし自分が外国で暮らしていて、日本語の表記が警告のみだったらショックだと思う」と感想を述べた人もいる。これを契機に引き続き活動に参加してくれるようになった人もいる。

調査結果はホームページに掲載しているが、地域差はあるものの、英語以外の言語による警告とサービスに関する情報を比較すると、警告のほうが多言語化されていることがわかった。特に、アラビア文字の言語やベンガル語、タガログ語、ロシア語、スペイン語は、警告表記しか見当らなかった。移住労働者を地域の一員やサービスの受益者としてよりも、地域社会の「安全」を脅かす存在として認識している現実が読み取れる。他にもさまざまな発見があったが、それらに関しては当該機関などに問題提起や提案をしていく予定だという。

○これからの展開

今回のプロジェクトで、実態調査と差別について考えるきっかけづくりは実現できたが、問題と思われる掲示物をなくすことまでには至らなかった。これはこれからの課題である。

また、調査地域については、東京以外では、横浜、埼玉、大阪にとどまってしまった。呼びかけに応じて、各地から関心は寄せられたものの、時期の問題もあり、調査実施までにはいたらなかった。マニュアルなどを整備し、これからも引き続き呼びかけていく予定だという。

この活動を通して、矢野さんたちは、差別警告表示だけでなく、社会そのものが監視社会化へ向かっていることを強く実感したという。地域の安全は、相互監視や通報・警告、異質な者を排除することによって守られるのではなく、相互理解やコミュニケーションによってこそ、実現されるはずである。治安の悪化や犯罪の多発が声高に叫ばれるなか、安心して暮らせる地域社会をつくるためには何が必要なのか、そもそも安心安全とは何なのか、このようなことを冷静に考える機会をつくっていくことがいま最も求められているのではないだろうか、と矢野さんたちは考えている。

矢野さんたちの活動は次のステップへと向かいそうである。

■自死遺族支援のための「つながり」づくり

特定非営利活動法人 自殺対策支援センターライフリンク

団体名 特定非営利活動法人自殺対策支援センターライフリンク
代表 清水康之
設立 2004年10月15日
目的 「自殺は日本人の生き方の問題である」と捉え、広く社会に連帯を呼びかけながらその対策を実践し、新たな生き方についての提言を行っていくこと。
所在 東京都目黒区
ホームページ <http://www.lifelink.or.jp>



○プロジェクトの目的と概要

NHK「クローズアップ現代」のディレクターだった清水康之さんが自殺の問題に出会ったのは5年前。番組づくりのために参加した自死遺児の集いだった。以来、清水さんにとって自殺の問題は、日本社会の本質につながる大きなテーマとして、頭から離れないものになってしまった。日本ではいまや毎年3万人を超える自殺者がいるが、もっとその問題に真剣に取り組まなければいけない、報道だけでは問題は解決しない。思いが高まった清水さんは昨年NHKを退職、仲間呼びかけて設立したのがライフリンクである。思い切った転身である。

仲間との話し合いの中で、100万人以上と推計される自死遺族支援から取り組むことになった。支援といっても資金があるわけではない。清水さんたちが考えた支援は「つながりづくり」だった。自死遺族の多くが、社会からの支援もなく、孤立感に陥っていることを取材を通して実感していたからである。

そこでまず、自死遺族への心のケアなどを充実させていくために、自死遺族の会同士の「横のつながり」をつくることを目指したシンポジウムを開催することにした。遺族の会は、全国にまだ十数団体しかないが、「つながり」ができれば、新たな会の立ち上げを共同で支援したり、声を一つにして行政に働きかけたり、より社会的な活動ができるようになると思ったのだ。そのシンポジウムをマスコミで取り上げてもらい、社会の関心を高めていくことももちろん目標の一つだった。

○活動内容と成果

2月20日、「自死遺族支援に向けて遺族会のつながりを！」というテーマでのシンポジウムを開催した。100人を超える遺族、自殺防止に取り組む研究者や行政担当者、関心をもった市民など170人を超える人が参加してくれた。予想を上回る人数だった。シンポジウムは、基調講演やパネルディスカッションだけでなく、参加者がグループに分かれて「語り合う」時間を設けるなど、「つながり」を意識した参加型のスタイルをとった。真剣な話し合いによって、遺族会のつながりが育ち、社会に対する働きかけが始まる基盤ができたといっていいただろう。

多くのマスコミが取材に来てくれたのも大きな成果だった。遺族のケアや自殺防止には、さまざまな分野の連携が大切だと清

水さんは考えている。しかし、日本では遺族同士が互いの経験を語り合うセルフヘルプグループはまだ少ないうえに、横のつながりも弱い。問題が問題だけに当事者たちからの情報発信も難しい。法的整備が遅れているため、行政も支援活動に取り組みにくいという現実もある。そうした状況の中で、遺族は社会的に孤立しがちである。この問題を社会全体の問題にしていくためには、このシンポジウムがテレビや新聞で報道されることの意味は大きい。

各紙とも大きな紙面で報道してくれた。それを見た全国の自死遺族の人たちからの問い合わせも殺到した。自殺の問題に関心を持ちながらも、何をしたいかわからなかった一般の人たちからの問い合わせも多かった。清水さんたちは、改めて自分たちの活動の社会的意義を実感したという。

○これからの展開

シンポジウムは成功した。しかし、実際に動き出すことで、自死遺族支援の必要性を改めて実感するとともに、そうした取り組みはひとつのNPOだけでは限界があり、さまざまな団体や行政などと連携して、しっかりした体制をつくっていく必要があることもわかった。取り組む課題も見えてきた。

日本では自殺対策に関する法整備は遅れており、それが行政がなかなか動けない理由になっている。これほど大きな問題になっていながら、支援する仕組みがないことも問題だ。この問題の先進国であるフィンランドでは自殺対策の法制度が整備されており、対策マニュアルもできている。

ライフリンクの次の取り組みは、フィンランドの取り組みやシンポジウム後に届いた「声」を国政の場に届け、自殺対策に関する法的整備を働きかけることになった。5月30日に参議院議員会館で国会議員に呼びかける集会を開催する予定である。活動はさらに広がっていくだろう。

「自殺は日本人の生き方の問題である」という清水さんたちのメッセージが、社会のあり方を変えていく大きな動きになっていくことを期待したい。

■留学生のボランティア派遣事業

特定非営利活動法人 東京エイリアンアイズ (TAE)

団体名 特定非営利活動法人東京エイリアンアイズ (TAE)
 代表 高野文生
 設立 1999年3月3日
 目的 外国人と日本人の双方へ向けて、情報、人権、福祉に関する事業を行うこと。そして在日外国人の人権擁護ならびに日本の内なる国際化に寄与すること。
 所在 東京都文京区
 ホームページ <http://www.tae.or.jp/>



○プロジェクトの目的と概要

東京エイリアンアイズ (TAE) は、日本の内なる国際化を促進するため、外国人留学生、就学生に関する交流、調査、支援、相談、研修の事業を展開している団体である。代表の高野文生さんが大学の国際交流課の職員だった時に起きた留学生の人種差別事件をきっかけに留学生をネットワーク化し、力をつけようという思いのもと設立された。

団体名の「エイリアン」には、日本における外国人留学生としての悩み、痛みを身をもって経験した当事者。そして彼らの味方になることで自らも組織から疎外されてしまった (= alienated エイリアネイテッド) 日本人。この両者が力を合わせ、視点を合わせるといこと。そういう新たな関係構築への意思と願いが込められている。

今回のプロジェクト留学生のボランティア派遣事業は、「留学生が部屋を借りられない」「部屋を借りるために必要な保証人がいない」「アルバイトが見つからない」「日本人から差別や偏見の目で見られる」などあまり知られていない留学生の生活環境を取り巻く問題に対し、留学生を各地のボランティア活動に派遣することを通して、国内の国際化・多文化理解を促進し、日本社会における留学生のイメージアップを図ると同時に留学生の日本における人的ネットワークを構築することを目的にしている。

○活動内容と成果

留学生のボランティア派遣事業は、受け入れ団体を募ると同時に、日本人学生サポーターも募集しながら進めている。これらはホームページ上で申し込めるようになっており、このプログラムは留学生交流団体ワールドユニオンに委託している。

そして、この留学生のボランティア派遣事業と連結して行っているのが、「保証人ボランティア制度」である。これは、留学生が進学、就職、ビザ、アルバイトなどを行う際に一定の金額を預り金としてプールして共済組織をつくり、部屋を借りる際に日本人のボランティアにリスク無く名義を貸してもらおうという制度だ。この制度とボランティア派遣を結びつけることによって、ボランティア活動をした分だけ預り金を直接返金していく仕組みをつくっていく。連結する役割の一つとして「ボランティアパスポート」をつくり、1時間ボランティア活動を行ったら Itae ポイ

ントとし、ボランティア先で印をつけてもらい、見合った分の金額を預り金から返していくのである。

この仕組みを活用して、留学生のボランティア活動を広げていくことで、目的である日本の内なる国際化、留学生の日本における人的ネットワークの両方が同時に実現していこうと高野さんたちは考えたのである。

その成果はすでに出始めている。ボランティアパスポートを作成してから半年で派遣した留学生 47 名。受け入れ団体の数 12 団体。ボランティア活動を通して、今まで留学生を雇ったことなかったお店のオーナーがアルバイトに留学生を雇ってくれたことや一緒にボランティア活動を行った日本人と留学生がそれをきっかけに友人となり、帰国後も交流が続いていることなど、うれしい動きが出てきている。また、地域のボランティア団体や社会福祉協議会で頼りにされている留学生も出てきており、ボランティア派遣事業は順調な滑り出した。

しかし、保証人ボランティア制度との連結がまだうまくいっていない。それぞれ独立して動いているのが現状だ。スタッフの不足やボランティアの受け入れ団体の不足でプロジェクトの広がりもまだこれからといったところだ。

○これからの展開

今後は「ボランティアパスポート」をさらに広めていき、保証人ボランティアとの連結を図っていく。今現在保証人の必要がなくても将来的に必要な時にポイントが使えれば良いとしており、高野さんもボランティアパスポートが全国に普及することで、留学生の地域社会への『パスポート』となってくれればと考えている。

現在は都内の一部の地域に集中してしまっているが、今後は地域を広げていく必要がある。そのため、スタッフの確保とボランティア受け入れ団体の拡張に取り組む計画だ。

ボランティアを熱心に行う留学生の姿は、留学生に対する地域での評価や偏見を変えていく。そして地域の人とともにボランティアをすることで交流が深まる。その思いは実際にボランティア派遣をする中で確かなものとなってきた。

今後のボランティアパスポートの広がりが楽しみである。

■ Happy Postman 参上!小学生ボランティアグループが地域に幸せをお届けします! Happy Postman

団体名 Happy Postman
代表 室谷純佳
設立 2004年8月10日
目的 これからの時代を担う小学生が中心となり、地域社会のさまざまな人たちが手をつなぐかけはしとなり、私たちが住んでいる地域社会を、日本に誇れる「すべての人にやさしいノーマライゼーション実現の町」にしていくこと。
所在 大阪府和泉市
ホームページ なし



○プロジェクトの目的と概要

Happy Postman は、企画から実際の活動まですべてを小学生が担っているボランティアグループだ。もちろん代表も小学生。支援する大人たちはいるが、あくまでも手伝い役で、主役は子どもたちである。最近、中高生のボランティア活動は盛んになってきているが、小学生だけのグループはまだめずらしい。

Happy Postman が生まれたきっかけは、小学生たちのボランティア体験だった。昨年の夏休み、福祉についてまとめるという宿題で、室谷純佳ちゃん(代表)が地域のボランティアセンターを訪ねたのが、その縁で仲間の小学生たちと福祉施設でのボランティア活動に参加したのである。みんな初めての体験だったが、とても楽しかったので、夏休みだけのボランティアではもったいないということになった。劇や遊びごとが大好きな彼女たちは、それを誰かに見てもらえたらもっとうれしいし、それに福祉にもちょっと関心が出てきたのである。

たまたま純佳ちゃんのお母さんは、以前市役所で障害のある人たちの支援に係る仕事をしていたのだが、当時から障害のある人をはじめとした社会的弱者と呼ばれる人たちを楽しませ元気にする活動ができないだろうかと考えていたという。

この2つが結びついて生まれたのが Happy Postman である、今回のプロジェクトは、「Happy Postman 参上!小学生ボランティアグループが地域に幸せをお届けします!」。Happy Postman が本格的に地域にデビューするにキックオフプロジェクトである。

○活動内容と成果

Happy Postman の基本方針は「無理せず、できる範囲の活動を、メンバー主体でぼちぼちいこか」だ。何をするかは月1回の定例会でみんなで話し合っ決めて。大人たちも参加するが、司会も記録も子どもたちで、大人は決まったことの実現に最小限の範囲で協力するようにしているという。

スタート以来、さまざまな活動をしている。毎月1回は子育て支援センターの保育所開放に参加し、得意の歌を披露したり、マツケンサンバを踊ったり、ハンドベルを披露したりして、子どもたちにはもちろん、保育ボランティアや母親たちにも楽しんでもらっている。また、介護老人福祉施設にも出向いて、歌や劇

を披露し、お年寄りたちに喜んでもらい、元気になってもらっている。子どもたちのエネルギーは大きいから、Happy Postman が「参上」するだけでも、場が明るくなり、みんなリラックスして、気持ちのいい交流の場になることだろう。

市立図書館では小学生ボランティアが絵本や小説などの読み聞かせに取り組んだ。最初は前例がないので対応できないと図書館から言われたそうだが、活動を継続し、小学生ボランティアが読み聞かせをすることができるようにしていきたいと考えている。

また、市のボランティアフェスティバルやフリーマーケットにも参加しているし、最近では、他の自治体のイベントなどにも参加し、和泉市を超えた交流も始まっている。

このように、Happy Postman の活動は、幼児からお年寄りまでとても幅広く、また地域内部に限らない、大きな架け橋になりつつある。

○これからの展開

活動は順調である。応援している大人たちにとっては、もう少し企画や活動に入ったほうがいいかなと思うこともあったようだが、子どもたちが主役で活動してきたおかげで、自信とノウハウが子どもたちの中に育ってきていることは間違いない。子どもたちのつながりも深まっている。

Happy Postman の基盤はできたが、この活動をどう継続し、広げていくかが、これからの課題だ。子どもたちも小学校を卒業していくし、次世代へのバトンタッチも考えていかねばならない。ボランティアを募集するといってもどうやって募集するのか。それに応募が少なかったら悲しいし、多数の応募があっても対応できない。人数が増えてくれば、組織としてのマネジメントの問題も出てくるだろう。課題は多いが、この活動の意義を考えれば、もっと多くの子どもたちに Happy Postman になってもらいたいとまわりの大人たちは考えている。

今年の夏には、今までの活動をまとめたフォーラムを開催し、そこで小学生ボランティアの呼びかけを行う予定だという。そこからどのような物語が生まれるか、とても楽しみである。

■ Temple マスター (寺の清掃業務をビジネス化する) ステップ アップ アカデミー teachers

団体名 ステップ アップ アカデミー teachers
代表 松井優子
設立 2004年4月1日
目的 発達障害を抱えた学生、不登校や引きこもり経験のある学生、人間関係やコミュニケーションに不安のある学生が、集団の中で社会性を学び、生活力を身につけて、就労体験を積み、就労することを目指す。
所在 東京都中野区
ホームページ <http://www.step-up-ac.jp>



○プロジェクトの目的と概要

ステップアップアカデミー teachers は、ステップアップアカデミーという発達障害を抱えた学生、不登校や引きこもり経験のある学生、人間関係やコミュニケーションに不安のある学生が、集団の中で社会性を学び、生活力を身につけるための学校の教員6名から構成している団体である。代表の松井優子さんは、ステップアップアカデミーで働きながら、社会人大学院で経営情報学を学んでいるが、そこでの学びの中から生まれたのが、寺の清掃業務をビジネス化するという発想である。

企業における障害者雇用は、障害者の社会参加にともない必要性が高まっており、特例子会社も増えてきている。しかし、発達障害を抱えたり、コミュニケーションが不得手な若者たちの中には、障害者手帳を持っていない人も多く、就職が非常に困難である。また、就職できたとしても人間関係をうまく結ばず、結局は辞めてしまうことも少なくない。社会に送り出すだけでなく、そうした若者たちが働く場も創りだせないか考えたのである。

その第1ステップが今回のプロジェクトだ。寺の清掃業務をシステム化し、事業モデルとして運営できる体制をつくっていく。そして、ステップアップアカデミーが起業する第1号の事業として、卒業生を雇用していきたい。これが松井さんの思いである。

○活動内容と成果

寺の清掃業務といってもただ掃除すれば良いわけではない。それを通して、仕事をするものの意味や仕事の進め方を学んでもらわなければならない。そこでまず、対象とする清掃業務の課題を分析して、ステップアップアカデミー独自の段階的な目標達成プログラムを用いて、作業をパターン化していった。そして、1回の指示で1つの内容を示し、見通しも立てやすくなるようにし、清掃の範囲や掃除した場所が明確にわかるようにした。清掃マニュアルを整理したわけである。

人材育成やマナー研修にも取り組んだが、同時に仕事での協調性を築き、仲間との喜びを共有することができるようにメンタル面のフォローを行う体制も整えつつある。仕事しやすい清掃グッズの開発にも取り組んでいる。

現在、法乗院閻魔堂(江東区深川)から清掃を受託し、実際に報酬をもらって仕事を始めているが、取り組んでみると問題も

いろいろわかってきた。

事業の中心に考えていた墓清掃は、ほとんどの学生が行うことができるのだが、ビジネスとして受託する以上、単なる作業では仕事にならない。状況に合わせた対応とチームワークが必要だ。言われたことを言われた通りにすることはできても、指示がないと先に進めなくなることもあるが、それを避けるためにはリーダーの養成が不可欠である。学生以外の人をリーダーとして採用することも考えられるが、できれば卒業生や学生の中からリーダーは育てたい。

アルバイトをしたこともない学生も給料をもらえることで、働きたいという気持ちが生まれるだろう。そういう学生が増えれば、学生たち全体にも良い刺激を与えていく。実際の仕事を通して、働くことの意味や楽しさをわかってもらうことは、ステップアップアカデミーのミッションの実現のためにも大きな意味がある。

○これからの展開

学生たちはみんな言われたことしかできない。それが、気が利かないと誤解されてしまうこともあるが、現在仕事をもらっているお寺の住職さんには、仕事を一生懸命行う姿を評価してもらっている。しかし、仕事として受託するからには、もっと効率を上げなければならない。清掃マニュアルや清掃グッズの改善で、作業の効率化は目処がついてきたが、学生たちの意識を変えていくことも必要だ。状況に応じてチームをまとめていくリーダーの育成も急務である。

推進体制に関しては、メンバーが他の業務と兼任しているために時間調整に苦労したが、寺の年中行事の流れが一通りわかってきたので、これからは計画的に活動できるようになるだろう。

事業をどう拡大していくかも検討課題だ。墓だけではなく、清掃業務の範囲を広げていくためには、他の清掃業務もできるような清掃技術を身につける必要がある。他のお寺への開拓もしていくことにも取り組む必要がある。

課題は多いが、一つずつ解決しながら、新しい事業モデルが創られていこう。このプロジェクトが今後どう展開していくか注目していきたい。

■カフェ&マッサージ事業立ち上げプロジェクト スロー・ファミリー（旧称：手がたりの会）

団体名 スロー・ファミリー（旧称：手がたりの会）
代表 田辺大
設立 2004年1月7日
目的 カフェ&手がたりという複合型カフェを開業し、盲ろう者の自立を広げていくとともに、障がいを持つ人が起業できる、社会参加できる新しいモデルケースを実現し、さまざまな人々に勇気を提供していくこと。
所在 埼玉県さいたま市
ホームページ <http://fp.cocolog-nifty.com/slowfamily/>



○プロジェクトの目的と概要

田辺大さんは、社会起業家を支援する経営コンサルタントだが、自らもまた社会起業家としてソーシャルベンチャーへの取り組みを行っている。田辺さんが目指している社会は「豊かな多様性をもった社会」だ。外資系のコンサルタント会社で仕事をしていた田辺さんが、ソーシャルベンチャーの世界に転身した理由は、そうしたビジョンと無縁ではない。

田辺さんの強みは2つある。外資系会社時代に磨き上げた経営ノウハウとビジョンに裏づけられた多様性への感性（優しさ）だ。その田辺さんが、今回新たに取り組んだのが、盲ろう者（目と耳に障害を持つ人）たちと一緒にいる「カフェ&マッサージ事業」である。

発端は、盲ろう者たちと一緒につくった、手がたりの会での話し合いだった。「手がたり」とは、左右の手の指を3本ずつ使うことで点字の形に見立てて、手でコミュニケーションをする指点字方式にちなんだ名前である。盲ろう者たちの働く場づくりを話し合っていた時に、「生産者の生活や熱帯雨林を守るフェアトレードの美味しいコーヒーが飲めるカフェと盲ろう者によるマッサージが組み合わせたら、感動があるのではないか」という意見が出てきたのである。田辺さんはフェアトレードのコーヒーの輸入に取り組む社会起業家を支援してきていたので、イメージはすぐに大きく膨らんだ。

そしてスタートしたのが「カフェ&マッサージ事業」である。事業主体を設立し、事業展開の基盤を確立することが今回の目標である。

○活動内容と成果

まず取り組んだのが事業主体の法人化。収益を目指した事業展開をする以上は、事業主体も責任を明確にできるものになければならない。名称も「手がたりの会」から、つながりを大切にするという思いをこめて「スロー・ファミリー」に変えることにした。そして、みんなで共有できる事業展開の理念やビジョンを話し合った。まさに社会起業家支援を本業にしている田辺さんならではのスタートだ。

みんなで創った事業理念は、一言でいえば「一人ひとりが大切です。お互いのつながりも大切です」。そしてビジョンは、「人

の輪が広がり、多くの人々を元気付けたい」。こうした言葉の中に、関係者の深い思いと希望を読み取ることができる。

事業計画に関しては、すでにこれまでの活動の中でかなり具体的なイメージが描かれていた。後は事業展開する場所の確保と資金調達だった。

お店についても、みんなのイメージはまとまっていた。幸いなことに条件にあった貸店舗物件も見つかった。みんなの思いを実現する室内設計も、支援者の協力を得て、ほぼ完成した。

問題は資金調達だった。ここで問題が発生した。カフェとマッサージの複合型ということで予想以上の設備投資が必要となり、多額の借入を行う必要が出てきたのである。融資を受けるためにメンバーは奔走したが、融資の条件は厳しく、結果的には融資を断念せざるをえなくなった。融資が受けられなければ、計画は全面的に見直さなければならない。

しかし、そうした経緯の中で、メンバーの絆はむしろ強まっていった。そして、店舗なしでも、とにかく事業をスタートさせようということになったのである。動きだせば必ず次のステップへの道は見つかる。そう確信して、6月1日から出前マッサージの形でスロー・ファミリーはスタートすることになった。

○これからの展開

「カフェ&マッサージ」のお店は開店できなかったが、このプロジェクトに取り組んだおかげで、盲ろう者たちの自負心は高まり、結束も強まったと田辺さんは言う。「盲ろう者と健常者が、ゼロから起業について検討し、汗をかいてきたことははじめてではないか」（田辺さん）。そして、自らが始めないと状況は変わらない、という意識も強まり、開業に向けての熱意は一段と強まった。

6月からスタートする「出前スロー・ファミリー」は、マッサージ国家免許を持つ障がい者と通訳介助者がチームとなって、自動車に折りたたみ可能な軽量ベッドを搭載し、法人顧客を中心に出張サービスを行なう計画だ。現在、開業に向けて熱心な取り組みが進められている。

課題は多いが、展望は少しずつ見えてきた。それに挫折は必ずいつか役に立つだろう。スロー・ファミリーが店舗を開く日を楽しみに待ちたいと思う。

2. 活動費一部支援プロジェクト

最終選考に残った20のプロジェクトのうち、公開投票で選ばれた10件以外に対しては、プロジェクト費用の一部助成という形で10万円の支援費が提供されました。資金の関係で、申請プロジェクトとは内容が変わっているものもありますが、関連した活動の概要を紹介します。

いずれも新しい物語づくりに向けての魅力的なプロジェクトですが、詳しくはそれぞれの団体のホームページなどをご覧ください。

■日本版「高齢者委員会」準備会の発足

特定非営利活動法人シニア・システム協議会（代表 西川則雄）

<http://www.h6.dion.ne.jp/~senior/>

高齢者の課題は、高齢者自身で考え、検討し、解決していくことが効果的だが、その仕組みは日本ではまだ育っていない。米国やデンマークでは、すでに法制化された高齢者委員会制度があるが、日本ではほとんど知られていない。

日本でも、高齢者が主役になって活動する高齢者委員会制度を実現させたい。それがシニア・システム協議会代表の西川則雄さんの長年の思いである。簡単に実現する課題ではないが、まずは一歩踏み出さなければ何も始まらない、その一歩を踏み出すことが、今回のプロジェクトの目的である。

まずはできるだけ多くの人に高齢者委員会制度について知ってもらう必要がある。そこで、米国やデンマークの制度の関する資料を整理し、小冊子にして関係先に配布し、それを活用し



た勉強会や報告会などを開くことにした。そして、3月には、この制度に詳しいカリフォルニア在住のカルドマ・木村智子さんを招いて「活き生きフォーラム」を開催し、高齢者委員会制度をアピールしてもらった。フォーラムでは、元気なシニアの方々に元気な活動を発表してもらい、実態としての高齢者ネットワークを広げることに心かけたが、200人近い参加者が

あり、「高齢者委員会制度」への関心を高めることができた。

地元の船橋市の福祉行政計画のなかに、高齢者委員会制度の検討に関する項目を入れることもできた。日本版「高齢者委員会制度」の実現に向けての第一歩は着実に踏み出されたといっていいただろう。

これからの展開が楽しみである。

■奥津軽新生プロジェクト

奥津軽地域振興会（代表 木村桂三）

奥津軽地域振興会は、青森県の五所川原市の中心市街地商店街の復興に取り組むために、農業従事者、個人事業者、学校教師などの有志が集まって立ち上げた会である。大型店の進出によって、地域社会は大きく変わりつつあるが、代表の木村桂三さんたちは、もっと地域資源を活かした表情のある地域活性化を実現したいと考えたのである。

木村さんたちが考えているのは、地元の農業従事者と商工業者がタイアップして、地場産産品を原料にした、地場産業の活性化だ。例えばパン・お菓子・めん・ケーキなどの、日常的に消費される食品にしても、もっと地域に根ざした商品開発ができるのではないかと。これまであまり交流のなかった、さまざまな立場の人たちが知恵と汗を出し合えば、必ず道は開ける。これまで作付けしてこなかった新しい農産品も見つかるかもしれない。そ

うなれば、もっとみんな元気になるだろう。流れを変えなければならぬ。何ができるかはまだわからないが、とにかく動き出す。それが奥津軽地域振興会に集まった人たちの思いだった。

地域活性化に関しては、行政や商工会も取り組んでいるが、もっと地域資源を組み合わせるべきではないか。木村さんたちはそうした視点から提案し、働きかけている。問題が大きいだけに、なかなか形にはならないが、「小さな起爆剤になっているかもしれない」（木村さん）。

活動を始めたおかげで、県からも評価され、4月からは青森奥津軽振興会企業組合として法人格を得ることができた。前途は多難だが、木村さんたちの熱意は、必ず形になって表れてくるだろう。

■仲間による仲間のための遠距離介護の電話相談窓口の開設

特定非営利活動法人（申請中）パオッコ仲間ライン（代表 太田差恵子）

<http://paokko.org/>

「遠距離介護を行う子世代の情報グループ&応援団」のパオッコが今回取り組んだプロジェクトは、故郷の親をどのようにケアすればいいかと悩む人たちにに向けた情報支援の電話窓口の開設である。

これまでの9年間の活動で培ってきたパオッコ仲間と呼びかけて、似た立場の仲間として悩みを聞き、適切な情報を提供する、電話相談員になってくれるボランティアス

タッフを公募したところ、20人近い応募があった。その人たちに24時間の専門研修を受けてもらい、結果的に15人がスタッフとして登録してくれた。電話相談の名称も「パオッコ仲間ライン」に決定した。

2005年7月1日から週1回、窓口を開く予定であり、次年度以降は徐々に電話受付日も増やしなが、外部に向けての広報活動にも取り組む計画だ。また、相談の内容を情報蓄積する



仕組みも検討中である。誰かひとりの体験や情報が、パオッコを介して、大勢の仲間のものとなっていくことが、太田さんたちの目標である。

「パオッコ仲間ライン」がみんなに使われるようになれば、都会で暮らす子と故郷の老親との対話が増え、さらに子も老親もそれぞれが暮らす地域で、安心して住み続けられるようになるだろう。そのために、

少しでも充実した窓口となるように、焦らず、ゆっくり、1歩ずつ進めていきたいと太田さんは考えている。

遠隔地にいる両親の介護のために会社を辞めたり、転居したりする人が最近増えてきているが、「パオッコ仲間ライン」が広がっていけば、そういう人たちにも大きな福音になるだろう。これからの広がりを期待したい。

■市民の立場で介護保険の見直しを実現するプロジェクト

市民福祉情報 オフィス・ハスカップ（代表 小竹雅子）

<http://haskap.net/>

高齢者、障害者の支援に関わる活動を展開している全国各地の市民活動団体および関心を持つ市民をネットワークするため、国政情報や各地の活動紹介をするメール・ミニコミ「市民福祉情報」を精力的に配信している小竹さんにとって、いま話題になっている介護保険制度の改正問題はとても気になる動きである。利用者本位とうたわれているが、本当に市民の立場で考えているのだろうか。今回はそうした小竹さんの思いから、これまでの活動で広がってきているネットワークを活かして、社会福祉基礎構造改革のトップランナーとされる介護保険法に市民の意見を反映し、本当の「利用者本位」の制度を定着させたいというプロジェクトである。

当初は、ホームページを作成し、全国の市民活動グループや自治体をつなぎ、ホームページ上の意見交換やネットワークのなかで出された課題についてシンポジウムを開き、社会に呼びかけ、



国会にも働きかけていこうという計画だった。しかし、一部助成になったため、今回はホームページの作成に絞り込むことになった。

予定通り、昨年末にホームページは開設したが、これまでの活動の成果が見事に盛り込まれている。これによって、「市民福祉情報」やハスカップが行っている連続ワークショップへの申し込みも増えており、所期の目標は実現できた。また、

ホームページを運営していることにより、対外的な信頼の確認してもらえることができたのではないかと小竹さんは語っている。

小竹さんたちの精力的な活動は、このホームページによって、今まで以上に大きな影響力を発揮していくことになるだろう。そして、ハスカップが目指している、市民の立場で介護保険の見直しを実現するという目標に向かっての動きも、さらに加速されるのではないかと期待される。

■「みんなで作って、みんなで売ろう」紙漉きプロジェクト

特定非営利活動法人トゥギャザー（代表 中條桂）

<http://www.osakashinumedacity.com/together/>

障害者と社会の架け橋として障がいをもつ人たちの自立支援の活動を行なっているNPOトゥギャザーが取り組んだプロジェクトは「紙漉きプロジェクト」。牛乳パックなどを使って紙漉きに取り組む作業所は多いが、それぞれに仕様が異なりバラつきが多く、価格も高く売れていない現状がある。そうした状況を打破していくために、紙漉きに取り組む障害者施設や作業所が共同して、標準化された紙を使って商品づくりに取り組み、製品をみんなで売っていくというプロジェクトである。

すでに、トゥギャザーがコーディネーターになって大阪府下7つの作業所がネットワークを組んで卓上カレンダーづくりに挑戦したことがあるが、その体験を踏まえての取り組みだ。大量注文を可能にするために市場に通用する商品づくりに取り組むとともに、地域への販売を施設単位で計画的に行うような体制を組ん

だ結果、ECO カレンダー（2005 年度版）を 4000 部制作し、そのほとんどを企業や地域に販売することができた。

技術面における研修会を実施したことで、施設で働く障害者の方々の技術向上が図れ、品質は大きく改善されたが、同時に、施設間のネットワークが強まったことも大きな成果だった。

プロジェクトの成果は、昨年 12 月に「障害者のものづくりを考えるシンポジウム」において発表し、企業や福祉施設の人たちに評価してもらったが、さらに今夏開催予定の「牛乳パックの再利用を考える全国大会」でも発表する予定である。

今回は施設によって道具に違いがあったため、標準化が十分に進まなかった面があるが、こうした問題も徐々に解決しながら、さらにプロジェクトを発展させていく予定だという。新しい事業モデルとしても大いに期待したいプロジェクトである。

■パークでパクパク多世代間コミュニティづくり

パクパクサロン（代表 金子典子）

<http://www.geocities.jp/pakupakusalon>

「子供を遊ばせる場所が欲しい!」から始まり、「すべての世代とつながりたい!」へと思いを深めてきているパクパクサロンが取り組んだのは、みんなの力で公園を魅力的なコミュニティの場にしていこうというプロジェクトだ。選ばれた公園は、沼と雑木林を有する豊かな自然環境と歴史遺産に彩られた古河総合公園。そこを、市民主体で運営される現代のコモンズ（市民の共有地・コミュニケーションの場）にしていこうというわけだ。

パクパクサロンは、市民有志の集まりであり、メンバーも固定化せず、関わりたい人が関わりたい時に関われる、役割で参加する形態をとっている。活動の中心は、ほとんどが小さな子どもを持つ母親たち。子育てや仕事、家事を抱えつつ、熱心に取り組んでいるのは、みんなが気持ちよく触れ合える場がほしいという思いからである。

個人の集まりにしては目標は大きい。しかし、そこは生活力の



ある母親たちのパワーで、次々と問題を解決してきたようだ。「パクパクサロンの真の目的は何か?」などという話し合いを繰り返しながら活動してきたという。幸いに、古河総合公園にはパークマスター制度や公園づくり円卓会議があったので、それらとも連携できたことも大きな力になった。

現在までに、公園を舞台にした3回のパクパクサロン交流イベントを開催した。そうした活動を通して、確実に人の輪は広がり、目標としているコミュニティの形へつながっていった手応えも出てきたという。

こうした活動は、マスコミにも取り上げられ、市民にも知られるようになってきた。また古河総合公園に関係している専門家たちからも、従来のコミュニティ活動の発想を超えた「創造的無限定性」とも言える画期的市民活動」と高く評価してもらっている。

これからの展開がとても楽しみなプロジェクトである。

■不登校児の自然体験と大学生・高齢者との交流

あそあそ自然学校（代表 谷口新一）

<http://www.exe.ne.jp/~npp/asoaso/>

農業生活空間を遊びと学びの場とする家族型自然環境教育を行っているあそあそ自然学校は、子ども、親、地域住民、そしてボランティアスタッフなど関わる人みんなが遊び学び成長するためのもう1つの学校だ。さまざまな活動を展開してきたが、今回は不登校児に焦点をあてたプロジェクトに取り組んだ。これまであそあそ自然学校の活動に不登校児が参加したことがあり、その効果を体験していた谷口さんは、このプロジェクトを不登校児対象の事業に継続的に取り組むきっかけにしたい、と考えたのである。

不登校は、「怠け」というわけではなく、学校においていじめなど、存在を否定されて起きるケースが多く、まず存在を肯定することが必要である。自然は、厳しさもあるが人をありのままに受け入れてくれる。ありのままの自然は、自分もありのままでもいいのだという存在肯定力があり、自然体験は不登校児が生きる力をつける上で大きなきっかけとなる。



しかし残念ながら今回は一部助成になってしまったため、不登校児対象の事業は1年繰り延べて、連携を予定していた施設などとの関係を深めながら、その準備づくりに取り組むことにした。

たまたま通常の活動で行っている自然学校活動に、県内のフィリピン出身勤労者が5名参加することになり、日本語の問題や交流などマイノリティが

かかえる問題を解決する場として活用してもらったが、こうした体験から谷口さんは、ますますこのプロジェクトへの思いを高めてきている。

そして、今年の夏には不登校児の問題に関わっている富山県小杉町の「ほっとスマイル」と連携して、いよいよ不登校児対象の事業に取り組む計画である。

この活動が、あそあそ自然学校の世界をまた一段と広げていくことになるだろう。

■障害者が働くリサイクルショップ再生計画

特定非営利活動法人 ちいろば（代表 石田圭二）

<http://www.chiroba.com/>

障がいを持つ人たちと共に働く場を創ることを目指すNPOちいろばが運営するリサイクルショップ「ちいろばの家」は、もう20年以上の歴史を持っている。しかし、数年前、近所に大手リサイクルチェーンがオープンしたため、経営が悪化し苦戦を強いられるようになってしまった。こういうニッチマーケットにまで大手企業が入り込んできたのである。そこで、近くの大学で経営を学ぶ学生たちと「障害者が働くリサイクルショップ再生」プロジェクトを計画したが、残念ながら資金助成が一部だけになったため、今回は、多摩大学コミュニティビジネス研究センター（以下センター）の協力を得ながら、「マーケティング改善計画」プロジェクトを実施することになった。

問題点などを整理したうえで、センターのスタッフと一緒に調査票を作成し、1月に来店客を対象にアンケートを実施し、



158人からアンケート調査を回収することができた。その分析に基づき、センターからマーケティング改善計画を出してもらい、それを両者で検討した。そして、3つの改善に取り組むことになった。

まずチラシ。これまでは分けていなかったリサイクル品回収と不用品寄付のチラシを分けることで効果を高めることにした。2つめは、新商品として焼き立てパンの販売を始めた。これは好

評を博し、客層の拡大につながっている。3つめは、店員の接客の意識を高め、店の統一感を持たせるために、店員全員が、「ちいろば」という刺繍がはいったデニムのエプロンをつけるようになったことである。

事業型NPOにとって、これからはこうしたマーケティング活動も重要になってくるだろう。「ちいろばの家」のこれからの成果が楽しみである。

■Tシャツ・キャラバン～せんたくびより（DVがなくなる日）をめざして！

主張するTシャツの会（代表 畔上裕子）

<http://www.ne.jp/asahi/clothesline-japan/tshirt/>

主張するTシャツの会は、誰もが尊重される社会の実現を理念として、性別にもとづく差別と力の不均衡、とくに女性に対する暴力の解消と予防に関する活動、DV被害当事者の人権を守る活動を行っているグループである。DV（ドメスティック・バイオレンス）は女性に対する男性の暴力だけではなく、あらゆる暴力（戦争、人種差別、障害者差別、環境破壊など）の問題と構造的には同じで、つながっている。そして、あらゆる暴力をなくしていくためには、一人ひとりが自分を大切にするという意識を持つことであり、自分らしく生きるということとつながっている、というのがこの会の考えだ。DVと聞くと、「自分とは関係ない」と目をそらしてしまう人も多いが、DVの根底には、「自分を大切にする」「自分らしく生きる」という誰にとってもとても大切なメッセージがある。そのメッセージを、みんなに伝えていきたい。それが今回のプロジェクトだ。具体的には、DV被害者、その家族や友人がDVに対する思いや気持ちを書きこんだT



シャツを展示し、DVの問題を視覚的・身体的・感覚的に訴え、多くの人たちに身近で自分たちにも関係ある問題として受けとめてもらおうという企画である。

展示の場は、3月のアースデイ東京2005と決めた。若者たちが多く集まるアースデイにブースを出すことで、「DV＝女性問題」という垣根を取り払い、根本的には環境問題や平和問題

とつながるみんなの問題なのだというのを伝えられると思ったからである。狙いは見事に成功した。太陽の下でTシャツを展示し、参加型のアクティビティも行うことで、多くの人とつながることができ、孤立化、密室化というDVの抱える問題を克服する新たな活動のあり方を実感することができたという。

改めてTシャツの持つメッセージ力やアートの力を実感し、主張するTシャツの会の持つ独自性、斬新さを確認することができたことも大きな成果だった。「主張するTシャツ」の、これからの新たな展開が楽しみである。

■出前ミュージアム～芸術と障がいに触媒とした「愛のコミュニティ」の構築に向けて

特定非営利活動法人 海から海へ（代表 阿部公輝）

<http://umi.or.jp>

障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在を社会が認識し、人々がそれらを宝物として共有することができれば、もっと気持ちのよい、愛に満ちた社会が実現する。これが海から海への活動の理念である。今回取り組んだのは、優れた芸術作品、その作品を生む画家、および、その画家がもつ障がいと暮らしを、コミュニティに愛をもたらず触媒にしていくことを目指した出前ミュージアム活動の立ち上げだ。

今回の主役は、知的障がいをもつ画家田中瑞木さん。調布で育ち、作業所で仕事をしながら、これまで60点以上の芸術作品を生み出してきた。これまでに開催された多くの個展や受賞歴は、彼女の作品が観る人に感動を与えることを実証している。

この瑞木さんの作品を、彼女が育った調布の街の歯科医院、動物病院、寺院、商店など6か所で展示した。瑞木さんの絵が空間に温かさとしらさを与え、会話を生み出し、人と人とのつながりを深めていくとともに、併せて用意した瑞木さんの生活や環境を示すパネルやNPO「海から海へ」の活動を



示す会報などで、障がいとは何なのかを改めて考え、いのちのすばらしさに気づいてもらおう、それが出前ミュージアムを企画した阿部さんたちの思いだった。

作品に触れた人たちから、たくさんの感動が寄せられた。展示作業の協力の申し出もあったし、活動への寄付も寄せられた。

愛のあるコミュニティの構築に向けての動きが始まったのである。

美術館という限られた空間から地域という広がりのある場に設置することで、より能動的で豊かな交流を生み出す。そのふれあいこそが大切だと考えていた阿部さんたちの思いは、まさに成功したのである。展示したいといってくる商店や医院も増えてきた。2005年4月にオープンした調布市市民活動支援センター（あくろす）からも展示を依頼されている。出前ミュージアムは、着実に広がりだしている。

出前ミュージアムは順調にスタートした。次の課題は、出前の拠点となる「みずき美術館」の建設だと阿部さんたちは目を輝かせている。

3. イベント支援

「つながり」と「ふれあい」を目指す、各地でのコムケア仲間へのイベントに対しての支援を行いました。いずれも一過性のものではなく、新しい物語に向けてのプロローグ的な意味合いをもったイベントです。すでにそこからいくつかのプロジェクトも生まれだしています。

■「冬休みたごっこパーク8Days」

主催 特定非営利活動法人ゆめ・まち・ねっと（静岡県 代表：渡部達也）

<http://www.h6.dion.ne.jp/~playpark/>

開催日 2004年12月26日～2005年1月2日

子どもたちが子どもらしく生き生きと遊べる場所をつくっていききたい、しかもイベントとしてではなく、日常の生活のなかに。子どもたちの居場所づくりを中心にしたまちづくり活動に取り組んでいる、特定非営利活動法人ゆめ・まち・ねっとの渡部さんたちがこのイベントを企画したのはそんな思いからだ。

公園を遊び場にするイベントは広がっているが、連続8日間にわたる試みはめずらしい。期待と不安を交錯させていたスタッフたちを元気づけたのは地域の人々 楽しみである。



たちだった。たくさんの人たちが、様々な応援をしてくれたのである。子どもたちの元気な表情にあふれた8日間は大盛況で終わった。そして、新しいつながりもたくさん生まれた。

「子どもたちを地域で育てることができるまち、それはきっと誰もが生き生きできるまちになる」。渡部さんたちは改めて確信したという。ゆめ・まち・ねっとが、今度はどんなプロジェクトに取り組んでいくか、とても

■「コムケア・富山での知恵交流会」

主催 あそあそ自然学校（富山県：代表 谷口新一）

<http://www.exe.ne.jp/~npp/asoaso/>

開催日 2005年3月19日～20日

あそあそ自然学校の谷口さんが今回取り組んだのは、富山のNPO現場の最先端を見るコミュニティツーリズム。富山は「富山型デイサービス」などで注目されているが、そうした先進的な地域問題解決の現場に1泊2日で触れてもらい、じっくりと話し合う企画だ。「地方の問題解決力がその地域変え、日本を変える可能性がある」と谷口さんは考えている。

地元のNPOなどと協力してプログラムをつくり、広く県外にも呼びかけた結果、県外からも6組11名の参加者があった。富山県出身者が3人、ネットなどの情報から自主的に参



加してくれたが、東京などで活躍する人の中にも、出身地の地元を気にかけて、何か還元したいと考えている人が多いことがわかったのも大きな発見だったという。

訪問を受け入れてくれたNPOにも新しい刺激を与えることができた。手応えは予想以上に大きく、谷口さんはできればこうしたコミュニティツーリズム

を全国に広げていきたいと考えている。新しい物語がまた生まれそうである。

■「ちば NPO ユースフォーラム2005」

主催 特定非営利活動法人コミュニティアート・ふなばし（千葉県：理事長 下山浩一）

<http://homepage1.nifty.com/FUNABASHI-DW/>

開催日 2005年3月20日（土）

昨年に続く2回目のフォーラムだが、今回のテーマは「若者が危機だ!」。昨年同様、企画から運営まですべてが参加する若者たちの手づくりだったが、昨年を上回る37団体、140人が参加し、熱気のある集まりになった。主催者は「関東最大の若者NPOイベント」というように、これほど多くのジャンルの若者のNPOが自主的に集まるフォーラムはなかったのではないかと。しかも参加者は若者だけではない。中学生から60歳くらいまで、年代としてはとても幅が広がった。特に今回注目されたのが、10代の若



者たちで、10代だけのプログラムも圧巻だった。

ポスターセッション、ラウンドテーブル、パフォーマンス、出店とプログラムは実ににぎやかで、たくさんの新しいつながりが生まれたことは間違いない。

最後のステートメントでは、いよいよ「ユース・イニシアティブ・ジャパン(仮称)」が打ち出された。どんどん発展するこのイベントのこれか

らが楽しみである。

■「ひだまり交流会2005」

主催 特定非営利活動法人国際比較文化研究所（群馬県：代表 太田敬雄）

<http://www8.wind.ne.jp/mthc/>

開催日 2005年2月26日（土）

昨年に続く第2回目の「ひだまり交流会」の今年のテーマは、「生きる・働く・輝く」だ。社会のさまざまな現場でがんばっている人たちに話題提供してもらい、参加者みんなでお茶や食事をしながら、心を通わせあって、話し合っているという企画である。

これまでの社会の「縦割り」の関係を生かし、それらをつなぐ「横系」の活動としての交流を強めることで人を大事にする社会の構築を模索する、これがひだまり交流会の精神だが、今回は、多様な「仕事」の形態をつないでいくことで、縦糸と横糸を結び付けようということになった。そこで、就農者、



ベトナム難民、起業家、若者就職支援センターなど多様な立場の人たちから、働く現場からの報告をしてもらった。参加者は、さまざまな仕事の現場に触れることで、改めて「生きる・働く・輝く」を考え直す刺激をもらい、その後のベトナムの生春巻きや手作りの菓子を頬張りながらの話し合いは大いに盛り上がった。

た。

この交流会を通して育ってきている新しいつながりと信頼関係が、これからどのような形で展開していくか、とても楽しみだ。

■「アート種の大冒険！」

主催 Y2工房（福岡県：代表：岩崎庸子）

<http://artdane.nngo.jp/>

開催日 2005年3月5日（土）～19日

アートを「くらしの常備薬」にしたい。これがY2工房の目指していることだ。病院や福祉施設、学校などにアートに種をまく活動をしているY2工房の今回の舞台は、商店街や駅、学校や保育園など、町中である。題して「アート種の大冒険」。2週間にわたって、町中に約100点のアート作品が展示された。展示に当たっては、多くの人たちに協力してもらい、また新しいつながりも育ってきた。



障害を持った人たち、そしてアート関係者が参加し、「アートのある暮らしや社会」をテーマに、それぞれが、私にできること、やりたいことを話し合った。

この座談会の話し合いなどから、展示会終了後、さらに2か所で展示会を開催することになったが、そこからまた障害を持った人たちのアートのネットワークも育ちつつある。Y2がまいた種がどう

展示を開始する初日には「アート種座談会」も開かれた。育っていくか、とても楽しみだ。これまでの活動でつながりが育っている福祉や教育関係者、

■「市民参加の公園づくり～公園からつながろう」

主催 パクパクサロン（茨城県：代表 金子典子）

<http://www.geocities.jp/pakupakusalon>

開催日 2005年4月2日（土）～3日（日）

いろんな人たちと公園で楽しく遊びつつ、これからの「市民参加の公園づくり」を語り合いながら探りたい。これが2日間にわたって開催された、今回のパクパクサロンの企画イベントである。パクパクサロンはこの3年間、会場のひとつである古河総合公園を拠点にして活動してきたグループである。公園への思い入れは半端ではない。



ある。そこで会場も古河市と総和町の2つの公園が選ばれた。昼間は子どもたちと公園で遊び、夜は大人たちが公園施設に泊り込んでの夜なべ談義。まさに住民パワーのパクパクサロンならではの企画である。

今回のイベントで、これまでとは違った新しい人のつながりが生まれたようだ。課題もたくさん見つかった。パク

しかし、今回の狙いはもうひと

とつあった。パクパクサロンが活動している古河市が近隣の総和町と三和町と合併することになったのだが、その3つの市町で活動している市民活動や行政のつながりづくりで

パクパクサロンにとっては、公園づくりはまさにまちづくりなのだ。これからの展開を大いに期待したい。

■「神戸・中越・東京を結ぶ市民の集い」

主催 特定非営利活動法人 海から海へ（東京都：代表 阿部公輝）

<http://umi.or.jp/>

開催日 2005年3月5日（土）

障がいや自然災害は、命の不思議さと自然の大きさを伝え、明るさや励ましを通して、生きていることのかげがえのなさを気づかせてくれる。障がいを持つ人からの学び、自然災害からの学び、そこに共通するのは「命への輝き」だ。今回のイベントは、さまざまな体験からののちを学ぶ集まりのプロローグとして企画された。

開催地は大震災10年目の神戸。そして、神戸、中越の震災の渦中で活躍した人たちに、地域のつながりの重要性を体験的に話してもらうとともに、東京や神戸で障がいをもつ人か



ら教えを受け取り、共に生きようとする人たちの体験談も語ってもらった。最後は参加者みんなで、それぞれの地域でのコミュニティ作りの現実や展望を話し合った。

参加者は40人だったが、とても深い話し合いが行われ、そこに流れる人間の営みから生まれる力や愛と励ましを強く感じあうことができた。そして、参加者を核にして、いのちを学ぶイベントを

継続的に企画開催するネットワークが生まれた。新しい物語の、まさにプロローグとなったイベントだった。

■「スタンプング平和展～みんなで作ろう平和のミニ版画」

主催 スタンプング平和展実行委員会（愛知県：代表 松本れい子）

<http://peacestamp.fc2web.com/>

開催日 2005年4月1日（金）～8日（土）

スタンプング平和展は、アートを通して人々の心に少しでも平和を訴えたいという松本さんたちの思いで2001年から始まった、参加型の版画展である。すでに10回近く開催してきたが、今回は、平和へのメッセージをこめたコンサートも実施した。場所は名古屋の徳林寺。

単なる展示会ではなく、参加者に小さな版画を作ってもらうことで、人と人が触れ合う場所づくりをし、その作品は会場に残してもらい自由にスタンプしてもらおうというスタイル。「平和への一歩は知らない人たちと何かを共有すること」というのが松本さんたちの考え方である。小さい子どもから障がいを持つ人まで、誰でも気や



すく参加できるところがポイントである。今回の参加者は164人。近くの作業所の「てふてふ」の人たちも大勢参加してくれた。

これまでの展示会で、版画はすでに900枚ほどになった。それだけの平和への思いが集まったということだ。これからも平和展は継続していく計画で、名古屋だけでなく、沖縄、広島、長崎などでも開

催していきたいし、将来は海外にも広げていきたい意向である。

こうした活動のつながりが、大きな福祉につながり、世界の平和を生み出していく大きな広がりを感じたい。

■「介護保険法改正と市民活動を考えるシンポジウム」

主催 市民福祉情報 オフィス・ハスカップ (東京都: 代表 小竹雅子)

<http://haskap.net/>

開催日 2005年4月19日(火)

介護保険制度がスタートして5年目。当初の予定通り、制度見直しが進められ、介護保険法の改正案が議論されている。しかし、そこに介護の現場からの声がちんと届いているかどうか、には不安がある。それに、介護問題はすべての人の暮らしに関わる問題であるにもかかわらず、改正案の内容についての関心は広がっていない。より良い制度にしていくためには、介護の現場に関わる人たちが積極的に声をあげていかなければいけないし、社会の関心ももっと高めなければならない。

そういう思いから、ハスカップではこれまで数か月にわたり、



他のNPOと連携しながら、連続ワークショップを展開してきたが、いわばその集大成として企画したのが、今回のシンポジウムである。さまざまな視点から介護に関わっているNPOの人たちが一堂に会して、現場からの問題提起と前向きな提案を行ったのだが、

熱気あふれるメッセージが次々と出され、100人を超える参加者たちに大きな刺激を与えた集会になった。

このシンポジウムは集大成であると同時に、新しい物語の始まりでもあった。参加したNPOは、このつながりを活かしながら、さらに大きな輪を育てていく活動に取り組みだしている。これからの広がりが楽しみだ。

■「社会に風を起こしませんか!」

主催 SEGNET (東京都: 事務局長 斉藤正俊)

開催日 2005年7月9日(土) (予定)

SEGNETは、Social Entrepreneur Grass-root Network (社会起業家草の根ネットワーク) の略である。まだ生まれたばかりのグループで、代表も決まっていない。社会起業家に関心のある若者たちが、なんとなく集まっているうちに生まれたやわらかな集まりだ。

話し合っているうちに、それぞれさまざまなパワーを持っていることに気づいてきた。そこで、お互いができることを出し合って、それぞれのやりたいことを支えあう仕組みを作

ろうということになった。名づけて「起業通貨」。地域通貨の変種である。

まだメンバーが少ないので、広く社会起業を目指す若者たちに声をかけて、仲間を増やしたい、というのが今回の企画だった。その準備委員会を重ねているが、肝心の起業通貨の仕組みづくりで難航し、集まりは7月に延期することになった。7月には起業通貨が発表される予定である。

イベントはコムケア仲間のつながりを育てる場

コムケア活動は「つながり」にこだわっていますが、少しずつそのつながりがイベントなどでも見られるようになってきました。

今回、支援対象となったオフィス・ハスカップのイベントは、全国マイケアプラン・ネットワークやアラジンなど、これまでの支援先団体との連携で行われました。また第2回目で資金助成先となった日本ドナー家族クラブのプロジェクトの中から生まれた「生命・きずなの日」記念祭は毎年恒例のイベントになっていますが、今年度の記念祭には、コムケア仲間のNPO法人ライフリンクとNPO法人海から海へが、ゲストとして参加しています。会場ロビーには、海から海への田中瑞木さんの絵が展示されました。

福岡県のグループホーム縁側もまだ助成対象にはなかったことのないコムケア仲間ですが、県内および熊本県のコムケア仲間の協力を得て、地域介護リーダー養成講座を開催しています。

この報告書には出てきませんが、こうした動きが各地で少しずつ生まれだしています。

メッセージ

新たな支え合いの輪づくりに向けて コムケアの仲間になりませんか

日本は本当に豊かになったのでしょうか。
私たちは経済的な豊かさを追求するあまり
何か大切なものをおろそかにしてしまったのではないのでしょうか。

たとえば

お互いに気遣い合うところ。
人と人の気持ちのつながり。
物や自然と心との通わせあい。

そして

誰もが安心して気持ちよく生活できる社会。

コムケア活動は

そうしたつながりや社会をみんなで回復して行こうという活動です。
みなさんもぜひコムケアの仲間になってください。

資金助成プログラム以外にも次のようなプログラムがあります。
みなさんのご参加をお持ちしています。

コムケアメーリングリスト

コムケアサロン

テーマ研究会

コムケアフォーラム

コムケア活動や各地でのコムケア仲間の集まりの支援

コムケア活動を支援してくれるボランティア(コムケア応援団)も募集しています。

コムケア仲間やコムケア応援団への参加をご希望の方は
コムケアセンターまでご連絡下さい。



ケアップくん

コムケア活動は住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社の支援によって展開されています。

2005年5月20日

コムケア応援団

青木智弘、飯沼勇一、江原顕、大川新人、檜木八重子
鎌田芳郎、菅野弘達、紀陸幸子、古閑陽子、小山美代
坂谷信雄、佐藤隆、新谷大輔、新床美和、瀬谷重信
田辺大、堂垣翔平、富田幸博、那須直樹、平野幸子
増山博康、間野恵子、宮川元則、八木義樹、渡邊早苗

資金助成プログラム選考委員

片岡勝、北矢行男、木原孝久、町田洋次

コムケアセンタースタッフ

斉藤正俊、佐藤修、佐藤ユカ、橋本典之、宮部浩司、矢辺卓哉

デザイン

宮部浩司

企画・編集

佐藤修

発行（照会先）

コミュニティケア活動支援センター

東京都文京区本郷3-37-8本郷春木町ビル9階

〒113-0033

電話：03-5689-0957

Eメール：comcare@nifty.com

ホームページ：http://homepage2.nifty.com/comcare/

この報告書は住友生命社会福祉事業団および東レ株式会社の支援によって作成されました。

